
トイレトリップ ～トイレの向こう側の世界～

シバ (MW)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トイレトリップ ～トイレの向こう側の世界～

【Nコード】

N3421U

【作者名】

シバ（MW）

【あらすじ】

トイレに流されてたどり着いた先は自分の体すら見えない程の真つ暗闇。

スミレはそこで得体のしれない光り輝く狐に会う。

狼狽するスミレに狐が差し出したのは異世界へ通じる扉……もとい和式便所。

狐は嫌がるスミレを無理矢理そこに押し込むと、スミレはあつという間に流されていった。

そして流された先で出会った男はガリガリのスミレを見て「この鳥

ガラが俺の妻に？」と訳のわからない暴言を吐く。

和式トイレの向こう側には、ファンタジックな世界が広がっていた
——……。

登場人物

真宮 スミレ

トイレに流された哀れな女。

時間軸が不安定な時の壺に落とされてから、数分で数日分の時間が経過した為、ガリガリボロボロの状態で王家しか立ち入ることのできない泉に投げ出された。

気が強いけど弱い女。はったりだけは得意で、売られてない喧嘩も買う程。挑発の腕前はピカイチ？

ルイルミア＝レオ＝デルムルカ＝アルファルロ＝クミ＝カルフォー
ルドデンバスター（ルイ）

王様。表の顔は優しく強くて格好良い男。

国民からの信頼も厚く、非の打ちどころがない。

ただ、裏の顔は超Dの俺様男（知っているのは身近な者だけ）。

ヴァン＝コトウ

帝国騎士 第一部隊隊長

熱血兄ちゃん。意外と女性に人気が高い。

ルイの右腕として絶賛活躍中。

ルイが好きすぎてヤバイ。

セナ＝ミレイ＝ナスカ

一等星魔術師

若くしてその才を発揮したマッドサイエンティスト。

頭がおかしいせいか、みなあまり近寄らない。

ユンマクレガー＝ルドルフカ（ユン）

特殊暗殺部隊 第一部隊隊長

全然忍んでない暗殺部隊隊長。とにかく目立つのが好き。
任務をしてる所を誰も見たことがない為、能力がない穀潰しだと思
われてる。

ミリア

スミレ付きのメイド。

庶民の出だけと博識で器量も良く、世話好き。
時期メイド長ではないかと噂され、いらぬやつかみを受けることも。

序章

「はぁ〜……できた！」

私が祖母の所持している山で見つけたのは小さな社だった。

真っ赤な塗装がはげてすっかりみすばらしくなっており、周りには草木が生い茂って見落とすくらいの大きさ。

草刈り鎌で草木を適当に切ってしまうえば辺りはすっかり拓けて、ようやく小さな社が難なく見つけられるくらいになる。

「さてとー……」

白いワンピースを汚さないよう、美術の高校に通っていた時に使っていたペンキだらけの作業着を着て工具箱から朱色のペンキを取り出す。

一度始めたら徹底的にと思い、わざわざ街におりて修復用の板きれやら防水防腐ペンキを買ってきた。

ペンキをローラーでペタペタと塗り始めれば、辺りに懐かしい二オイが漂う。

「〜」

社はかなり小さいものだった為に、数十分もかからずに綺麗に塗り終えることができた。

私は道具を片付けに一度家へ戻ることにし、「また来ます」と声をかけると山を下る。

* * * * *

「ああ……お腹痛つ……」

のっけから汚い話で申し訳ないが、私は便秘が酷い。どのくらい酷いかと言うと、平気で四、五日は出ないくらいに酷い。

ちよつと道具を片付けてもう一度戻る予定だったのに、家に着いた途端ありえないくらいお腹が痛くなつて来た。

それこそ脂汗がダラダラ出るくらいにだ。

私の家は一応名家で『お嬢様』という部類に入っている。

元々気の強い私には窮屈だけど、家にふさわしい娘になるよう言葉遣いも行動も丁寧な物をと心がけているせいか、外面だけが良くなつていった。

ただ、こうやって一人になった時や人生のピンチ（主に腹痛）の際はどうしても素が出てしまう。

「ああ……痛い……でもこの感じだと、全部出るのにもう少し時間がかかりそう……ね……」

一人ブツブツ呟きながら、一旦トイレから出る為に座ったままレバーを引く。

「……………ん？」

レバーが取れたのに気付いたのは、手にパシャツと冷たい水を浴びてからだった。

気付いた瞬間、後ろへ引つ張られる。

「……………えやっ!？」

接近する便器を見つめながら最後に私が思ったのは、「汚い……………!」の一言だった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「……………」

私は汚物と一緒にトイレに流され、水中で何としても水を飲まなように……！　ともがき苦しんでいたはずだった。

それがいつの間にか「本当の暗闇ってのはこのことを言うんだろうな」と思える程の真っ暗闇に落とされていて、どのくらい時間が経ったか分からなくなってきた上に、濡れた体が異常に寒くて震えが止まらないという残念すぎる悲劇に見舞われていた。

「だ、誰かいませんかー？」

何度かした質問を闇に投げる。

返事はない……と思われたその時だった。

ポウ……と柔らかい光の玉が空中に浮かび、青白い光をユラユラさせながらこちらへ向かってくる。

「……」

それが自分に害があるかどうか分からないものの、あまりにも非現実的すぎたせいか、私は酷く落ちついてそれを眺めていた。

その光は私の目の前まで来ると、じわりじわりと人型をとる。

「小娘、待たせたな」

完全に人型になった時、目の前のモノが人ではなく真っ白の狐だ

ということに気付いた。

二足歩行の狐は、朱色で顔をペイントしている。

まるで神社の神主さんが着ているような和装に身を包み、私に人間の言葉で挨拶をした。

「……………えっ！？ ……ど、どうも」

「私はお前が直した社の主だ」

「社？ ……ってあの社ですか？」

「ああ。今朝、お前が草木を抜いたり朱を塗りなおしたアレだ」

「へえ」

ああ、夢か。

もしかしたらトイレに入ったまま寝てしまったのかもしれない。
だって人間がトイレに流されるなんてありえないもの。

「夢ではない」

目の前の狐はクスクスと笑うとしゃがんで座りこむ私に視線を合わせた。

「いや、しかし……………来るのが遅れて申し訳ない。随分と痩せてしま

「つたな」

「？」

「気付かないのか？」

狐の視線に自分の体を見れば、今まで闇で見えなかった自分の体が狐の体から発せられる光でぼんやり浮かび上がっていた。

腕も足も驚くほど骨が浮き上がっていて力を込めればポキンと折れそうだし、髪の毛なんてボサボサと尻のあたりまで伸びている。

「ええっ！？」

「いや、本当に申し訳ない。こんなに遠いとは思わなんだ」

「な、なんでこんな……私は、その、全然自慢じゃないんですけどもう少し太ってて……というか……いや……これ……ないわ……」

アワアワと服をめくったりして体中を調べる。

どこもかしこも骨と皮。

肌は垢が浮いて茶色くなっていたし、着ている物もボロ布と化していた。

「くうっさ……！ 臭いしっ……はあっ……あれ、なんか……疲れ
たっ……？」

先程から「こんなにも自分が臭いのはトイレを通って来たからだ」と思いこんでいたが、どうやらそれだけじゃなさそうだ。

というか、自分の体を調べる為に少し動いただけでこの疲れ具合。筋肉まで衰えてしまったかのような反応に思わず顔が引きつる。

「可哀想に……我が社を綺麗にした礼にと思うたが、とんでもないことになったな。人が弱いということをしつかり忘れておった。これでは弥三郎に怒られてしまう。不幸中の幸いと言うか、厠に流す前にお前の生命力を底上げしておいて正解だったな」

「ええ？ ちょっと、もう……っ……なんか本当に意味が分からないんですけど！？ トイレに流した犯人は貴方！？」

「つまり、社を綺麗にもらった礼に、お前を別世界へご招待するつもりであつたのだ。お前は兼ねてより『異世界に行きたい』と思つていただろう？ まあ小旅行といったところなのだが。ところが、ここ『時の壺』は意地悪で有名だな。オマケに時間軸もバラバラだ。例えばお前のすぐ右手側。今は壺時間が地球で言うところの弐時間程であるが、お前の左側では参〇分しかない。時の壺はお前と私の着地位置を変えたいらしい。こうしてなんとか見つけたわけだが、あの時からすでに……地球時間で言うところの数力月は経過しているようだ」

「……へえ」

「……お前、信じてないだろう」

「だって数力月って言ったら色々アウトじゃないですか。この状態

自体ありえないですし」

信じられる訳がない。

数か月と言ったら搜索願を出されるレベルだ。

それに私ほど大きい物がトイレに流れるわけないもの。

「都合のいい夢だこと。都合が良いついでに、どこに行くのか教えて頂けます？」

「…………お前が望むならどこへでも」

「あら、本当に都合のいい夢ですね。では江戸へでも連れて行って下さないかしら？」

人を馬鹿にするときにだけ出る悪い癖。

おばあちゃんや両親に「名家の娘らしく、常日頃からそう振る舞え」と言われた物語に出てくる（イジワル）お嬢様のような口調で、精いっぱい虚勢を張って強がる。

「江戸？ ああ、私が日の本に住みついでしばらく経った頃であるな。あの頃の日の本は今とはまた違った活気があって、実に良い時代であった。少し前の、お前達が『戦国時代』と呼んでいる時代が特に好きだな。当時はよく弥三郎と言う小童が……まあ、それはよいか。ではあそこに……いや、待て」

「？」

「どうやらお前を欲している世があるようだ。生憎向こうの世は好かんが、仕方あるまい。強引に扉を近づけたか」

「欲する？ あら、そう。でも私は江戸に行きたいのですけど？」

「いや、駄目だ」

きつぱりと断られ、ムツとした。

狐のくせに……！ 夢のくせに……！

「扉が近づけられてしまったのだ。もはや私の領域ではない」

「……江戸がいつて言ってるじゃないですか……お礼って言割に私の意見が聞けないんですかね？」

すっかり萎えてしまった私は、拗ねたようにいつもの口調に戻る。

「随分図々しい女子よ。叶えてやりたいがもう向こうの扉と引っ付いてしまった。そら」

狐は満足げに微笑むと、「たんっ」と軽く足を踏み鳴らした。その瞬間、パツと天から光が降り注ぎ、1つの和式トイレが現れる。

「……」

「さあ」

「いやいや、『さあ』じゃないですよ。おかしくないですか？
おかしいでしょう」

「申し訳ないが、私はアレしか出せない」

「……じゃあいいです。元の場所へ帰して下さい」

「もう入口はつないでしまった。さあ」

そういうと狐は私を力いっぱい押し、トイレの中に突き落とした。

「ひいつ!?!」

小さな悲鳴とともに、私は再び渦巻く便器へと身を落とす。

第一章 行キツク先八〇一

「ひやああああ……っ！！」

私は絶賛空中飛行中だった。
さっきまでは。

今は木にぶら下がっている。
それも崖の途中からはえた木に。

「ああ……っ！ 待って待ってまっ……！？」

そしてその木はミシミシと音を立てて、たった今折れた。
真下は深い濃紺色の泉だ。

どのくらい深いか分からないが、例え浅くないとしても意味はない。
い。

だってこの高さであれば水面に叩きつけられて死ぬかもしれない
ぐらい崖は高いのだ。

ひゅうひゅうと耳元で風が唸り、私は大きな音と水しぶきを上げて泉に着水した。

「ゴボオ……！？」

激痛が走り、バキバキと体中の骨から嫌な音がする。

私は「きつと運動不足の関節が『ご主人、こりや無茶だぜ！』と

いうアピールの為に音をたてたのだ！ 折れたのではなく、衝撃を加えて関節を鳴らすような感じなのだ！」と自分に言い聞かせながら、ズキズキ痛むような気がする手足を見て涙目になった。

温かいはずの涙もすぐ川へ溶け込み、あっという間に熱を奪っていく。

「つぶはあ！」

必死に這いあがって泉の中央にある島（？）まで行き、ゴロリとうつ伏せになって目の前に広がる真っ黒の森をぼんやり眺めた。空は驚くほど澄んでいて、無数の星が綺麗に瞬いている。

島の中央には1本の大きな大木が植えられていて、昼間であればさぞかし素晴らしい昼寝スポットになるだろうことが分かった。

「……はあっ……はあっ……死ぬかと……思っ……げほっ」

よろよろしながら起き上がろうとして、起き上がれないことに気付く。

棒きれのように細い手足で体重を支えることができず、起き上がるのを諦めて仰向けになった。

これだけでフルマラソンを完走したような息の上がり具合だ。体が動かせるので折れてはいないようで、よくぞ骨が折れなかったものだと思心しながらため息を吐く。

「……こ、これ……は……」

とにもかくにも、生き残るには人に会う必要があると思うわけだ。
ここがどこか知らないけど、夢にしてはえらく苦難を強いられる
夢のような気がする。

まさかここまで命の危険まで感じるとは思わなかった。

大抵は「死ぬっ！」と思った瞬間目覚めるのがセオリーのはずだし、なんでこんなに細いのかとか、いつの間に山へとか、トイレにいたはずなのとか……とにかく、考えてもすぐに答えが出なさそうなのは、早々に考えるのを止めた。

——…まさにその時だった。

私は突然聞えた男の声に体をびくつかせるはめになる。
ただ、疲れ切った体は声の方を見る余裕がなかった為、仰向けのまま様子をつかがう。

『omea; meritoyoyotaa?』

(これが例の女か?)

『na……ro.rokomana……』

(はっ……お、恐らくは……)

『omea;? ototoisatarisomia;maa;
rometosuhatitamusorirutoa?
kin,rusa,yosa;mo?』

(これが? この小汚い鳥ガラが俺の妻になると言うのか? 冗談
だろ?)

『kiaki……ahihohohokidu,ou
rutamose;o;ka;rihakku.』

(しかし……髪も目も漆黒の様な黒でございます)

『tamunoso; kiaki kometikise
ho rise rimutoa?』

(なるほど。しかしそれにしても……生きてるのか?)

覗き込んでいるのは確実に外国圏の顔なわけで……彼らが話す言葉は確実に日本語ではない。

ただ、疲れからか目がかすんでよく見えず、その目のかすみは「外国人……?」と思った瞬間にいよいよ酷くなって、その人がどんな顔をしているかとか、どんな髪の毛の色なのかなんてのがまるで分からないまま視界は更にかすむ。

「誰……?」

『nororo rise risaa』

(ほお。生きていたか)

「ちょっと、別に見世物じゃないんだから、向こうに行きなさいよ」

『tatio; yu kiwa, ne; serimuyosa;
orisuna?』

(……何語を喋ってるんだコイツは?)

『 koto.ki;nu;yotihoyaamiateh
aku.wanamiriruariamaisatos
e;kin,rua?』

(……その、自分にも分かりかねます。やはり異世界から来たので

しょうか？)

『riwa.hasa; tayosohorireyota.
(いや、まだ何とも言えんな)

言葉が通じないとはなんと不便なことだろう。
こちらが喧嘩を売っても通じない。
まあ、悪口を言う分には問題なさそうだけど。

『rori.sorukisamaoyotanoteso
ayati.tamemu.』

(おい。お前、どうしたらこんな骨と皮になれる)

「……何言ってるのか分からないわ。夢の中でまで私を困らせないで。夢は夢らしく、幸せな物だけ私に提供すればいいのよ」

『sa.hesa;. hasu,sauosona;a;s
uruki;tarita.heyoso;rutaosot
itassu,sahatosaa;.』

(駄目だ。全く言葉が通じないな。面倒なことになったものだ)

『nara……』

(はぁ……)

何やら相手もどうすればいいのか分からないらしく、戸惑ったような空気が流れる。

助ける気がないのなら、ボーっとしてないでどこかへ行ってしまう

えばいい。

ただこの哀れな姿を見られるだけというのも、居心地が悪い。

「さつさどどこかに行つてちょうだい。貴方、私の夢の産物のくせに生意気だわ」

『rori . hokaakise orisuna roosu ,
semutoa?』

(おい、もしかしてコイツは怒ってるのか?)

『sekiwo , ruterere . tatike oyotaki ; wo , rusaritatotisakuehokaku ; himameserimusa ; etatose ; kuma so ; rurisakihakua?』

(でしょうねえ。何せこんな状態なのに助けもせず見られているだけなのですから……どう致しますか?)

『..... noyosoruti heyoso ; ru sa ; ta .』
(……本当に面倒だな)

いつまでも去ろうとしない男達に一言怒鳴ろうと力を込めた時、私の意識はフェードアウトしていった。

(ああ、これでようやく目覚められる……)

意識が無くなる寸前、男が何かを言っている気がしたけど、私は

それを無視した。
どうせ解らないし。

ただ、それが私の人生を変える程重要な告知だなんて夢にも思わ
なかつたけど。

第一章 行キツク先八〇二

「うつ……」

ぼんやりする頭。

ボーっとしてるうちに周囲が明るいことに気付き、「ああ、朝か」と思った。

学校に行かなければ……そう思って立ち上がろうとして、力が入らないことに気付く。

「？」

目もかすんでよく見えない。

そもそも、「おばあちゃんの家に来ていたのだから学校は無いのだ」と言つことに気付き、「であれば体調も悪いしもう少し寝るか」なんて呑気に考えていた時だった。

「……あゝ」

なんとなく出そうとした声が出ない。

(うわ、驚愕の声すら出な……じゃなくて、まずい。非常にまずい。すっかり忘れていたけど、私はトイレにいたはずで……)

トイレにいたのに朝が来ている。
トイレに入ったのは昼過ぎくらいだ。
くどいようだが、今は朝……。

(トイレで一夜を明かしてしまった……お嬢様なのにトイレで……)

自分に対する怒りと失望で思わず深いため息を吐く。
ゆっくり瞬きをすれば、ようやく視力が回復し始めた。

「……っ!？」

視力が回復した目で初めて見た物は、カプチーノ色の綺麗な髪を
まとめ上げたメイドさんのような女の人。

向こうも相当驚いた顔をして、何事か叫ぶと部屋を出ていった。

(……日本語……じゃなかった……)

パニックの頭で「一体何が……」と考えて、ようやく夜の出来事を思い出す。

（うそ……あれ、夢じゃなかったの……？）

てつきり夢だと思っていた……いや、思いこもつとしていた非現実的な事件。

リアルすぎるシーツの感触。

リアルすぎる鳥の鳴き声。

そのどれもが、「これは現実なのだ」と訴えかける。

「……ふひっ」

思わず乾いた笑いが口の端から漏れ、喉が渴いてることに気付いた。

起き上がれないまま目だけで辺りを見回せば、ヴェルサイユ宮殿もかくやと思うほど豪華な装飾や内装。

そこかしこにある「我が家にある物とは格段に質が違う」と、何も分からない私が見ても一発で分かるほど高そうなアンティークの置物。

よく見れば寝ているベッドだってシーツから何から全て上質と思えるシルクだった。

そのシルクには物凄く細かい刺繍が入れてあり、その模様の細かさから機械ではなく人が施したものだと分かる。

(……、どこよ……？)

あまりにも非現実的なことが立て続けに起こって軽くパニックになつていると、ドアがノックされて医者と思われる白い服を身にまとった人が、先程のメイドと一緒に入ってきた。

『inu; yona r i a a ; se ; k u a ?』

(気分は如何ですか？)

……分からない。

なんて言ってるんだろう。

でも医者っぽいし私の様子を尋ねてるに違いないと思い、「取り合えず飲み物もらえますか？」なんて言いながらベッドの横のサイドボードに乗っている水差しを見つめた。

『……o h a s u , s a t a . n e r i a t o r i r u s o r
o m i k i ; w a , t a r i a ……』

(……困ったな。陛下の言つとおりじゃないか……)

『……t o h i h o t o s e ; k i n , r u a ?』

(……飲み物でしょうか？)

よく分からなそうにしている医者に、私の言わんとしていることを理解したらしいメイドが恐る恐る私を起こす。

そしてゆっくり水の入ったコップを口に近づけてくれた。

私にはありがたくそれを貰って飲み干し、「ありがとうございます」と頭を下げる。

その瞬間、メイドがパツと私から手を離して目の前でブンブンふり、慌てた医者共々床に頭を擦りつけて何かを叫んでいた。

(……これは)

突然の出来事にポカンとしていると、扉の向こうから声がかかって重厚な音を立てながら開く。

そちらを見れば、背が高く色素の薄いこの世のものとは思えない程のイケメンが立っていた。

真っ白な髪は良く見れば薄いクリーム色で、目は血のように赤い。

短く整えられた髪は後ろに流れる綺麗なカーブを保っていて、切れ長の目にシャープな鼻筋と眉……まあ、とにかく。

「貴女にとっての『イケメン』ってなあに？」と聞かれたとして、乏しい想像力で思い描けるだけのイケメンを思い浮かべたはずなのに、それを遥かに凌ぐほどのイケメンだったということだ。それがこちらを見ているのだ。

『roisaa』

(起きたか)

医者とメイドは頭を下げたまま器用に壁側による。

「……え？」

聞き覚えのある声にカツと血が沸騰する。

「アンタ!!! 弱ってる私の目の前で助けもせずにダラダラ喋ってたやつあゝ……」

勢いよく起き上がって叫び、勢いよくベッドへ逆戻り。

目眩でフラッフラの頭を押さえながら唸っていると、男が再び何かを呟いて近づいてきた。

何かを私に話しかけていたものの、分からないので右から左へ聞き流す。

『r r i . h i h i y u a k e s o r i s u , s e m u s a ;
m o r u .』

（おい、耳を貸せと言ってるだろう）

「いいっだああああ!？」

ブツツと音がして耳に激痛が走る。

一瞬にして熱を持った耳たぶは、次の瞬間ヒヤツとして痛みがおさまった。

「な、なんなのよ!? 今のなに……!？」

「思ったより元気そうだな。小娘」

「は!？」

息苦しさにハアハアしながら男を睨みつければ、「こんなガリガリでは耳飾りも似合わない」とほざいて鼻で笑われた。

「その耳飾りは言葉を翻訳するものだ。無くすな」

「耳……飾りって……まさか穴開けたわけ!？」

「開けるほかあるまい。無理に取ろうとすると脳を傷つけるから引っ張るなよ」

「何それ……!？ そんな重要なことを私の許可を得ずに……!」

「お前、さつきから口が悪いな。どこの庶民だ」

「関係ないでしょう! それよりここはどこよ! 助けてくれてありがとう!!!」

「怒りながら言うな。全然ありがたみが伝わらん」

怒りが収まらぬままフツと鼻息荒く視線をそらせば、視線の先にいた医者とメイドが真っ青な顔で私を見ていた。一体何をそんなに恐れているのだろうか。

「あんた誰よ。私は真宮 スミレ。スミレが名前よ」

「スミレ？ 随分珍しい名だな。やはり異世界から召喚しただけのことはある」

「俺は「ちよつと待つて」

「……なんだ。俺の話を遮るとはいい度胸だな」

「……召喚？ 召喚って言ったの！？ 今！」

「だつたらなんだ」

狐は何と言った？

確か、『どうやらお前を欲している世があるようだ』と言っていた気がする。

江戸に行けない悲しみで聞いちゃいなかったけど、「欲している」？
ということは……

「あんたが私を呼んだのね！？」

「だからそう言っているだろう！ 騒ぐな！」

「信じらんない……！ 最低！！」

「お前の都合なんか知らん。召喚とはそういうものだ」

「誰のせいでこんなガリガリになったと……」

「ガリガリ？ それは俺のせいじゃない」

キツと睨みつければ「ああ、そう言えば」と男が続けた。

「お前、どうやってたらあんなに汚くなれるんだ。メイド長に渡した時、あの鉄壁が顔をしかめていたぞ」

「吸い込まれたのよ！ トイレに……！ それも2回も！」

イライラと怒鳴れば、「そ、それは……」とみんなから同情めいた視線を貰った。

「お前の国のトイレは……その、随分でかいんだな……人が落ちる程なら、柵を置くなりサイズを小さくするなりすればいいものを」

「標準サイズに決まってるでしょう！？ 白い狐のせいよ！！」

「まあ、よく分らんが、それほど元気であれば話もできよう」

そう言って後ろを見れば、メイドが慌てたように椅子を持って来て差し出す。

男は何の躊躇も（お礼も）なく椅子に座り、「さて」ともったいぶってこちらを見た。

「お前を呼んだのはほかでもない」

「待つて。その前に貴方の名前を聞いてないわ」

「……そう言えばお前に遮られたままだったな。本来なら首をはねる所だが……それくらい強気な方が都合が良い」

「何の話？」

「お前を俺の妻にする話だ」

「ふーん。それより名前を」

「ルイルミアレオデルムルカアルファルロクミカルフォルドデnbasterだ」

「あ？」

「……何故怒る」

「分かりにくいわよ。ルイでいい？ 悪いけど、最初しか聞き取れなかったわ」

「……お前、本当に失礼な奴」やだ、ちょっと待つて……！？ 嫁！？ 誰が！？ ていうか失礼って言った！？ あんたの態度が失礼じゃないっていうのなら私だって態度を改めるわよ……！」

「嫁はお前に決まってる。まさかお前みたいなのが出てくるとは思

わなかったが、仕方あるまい。それよりお前、少しは俺の話を聞け。そしてお前が失礼なのに変わりはない」

「何よそれ！　つまり……もしかして私の世界には戻れないってこと！？」

「当たり前だ。元より、戻る方法などない。だが、問題はそこではなく、一度落ちつけ。色んな話がごちゃ混ぜになっていて何が何やら……」

「なっ……！？　あ、あのね！　貴方が誰か知らないけど、ここは私の国じゃないでしょう！？　召喚ですって！？　と、とにかく……なんか信じられないけど、実際に起こってるんだからそこはしょうがないわ。そうじゃなくて……あああゝもう！！　つまり！　私の国でないなら、例え貴方が王様だろうと法の番人だろうということと聞く必要ないと思わない？　いや、このタイミングでこれを言うのもなんか違う気がするけど……！　貴方の言うことを素直に聞くにはあまりに都合のいい話ってことよ！　そちら側にとってね！！　私は全然良くない！」

「愚の骨頂だな。確かにお前はこの国の人間ではないが、この国の全ての人間は俺を中心としている。お前は弱い。たった1人の異端児が暴れた所で、ねじ伏せられるのが関の山よ。従っていた方が利口だ」

「冗談！　私をそこら辺の女と一緒にしないでく……え、あなた偉いの？」

「ソフィア帝国　第十六代国王だ」

「…………ふっ」

それでこの豪華なお部屋……

そしてメイド……

そう……そうなの……

「格の違いを思い知った様だな」

意地悪そうに笑うルイを見て、悔しくなった私は鼻息荒く人刺し指を付きつけた。

「格の違い！？ 誰がよ！ 馬鹿じゃないの！？ 全部あんたの思い通りに行くと思ったら大間違いよ！！」

第一章 行キツク先八〇三

追い出された。

こんなボロボロでくたかなのに追い出された。

彼は私の文句に眉をひそめたかと思うと、たった一言で「ルイって本当に王様だったんだねって」くらい兵士を集めて、あっという間に私を城の外へ追い出した。

「くっそ……」

打ちつけた尻が未だに痛い。

ノロノロと立ち上がれば、城門の所にいた兵士が「早く行け！」と怒鳴る。

今までお嬢様な生活（なんとなく性格が分かるとは思うけど、実際『お嬢様』っぽくはなかった）をしてきたけど、こんな仕打ち初めてだ。

「……いい度胸じゃない。誰の力なんて借りなくても生きていくわ」

悔しいことに「今着ている洋服はくれてやる。売るなりなんなりしろ」と、ガリガリの体に似合わないお嬢様のような服を着せられたままだった。これは売れば良い。王宮の服とあらば当分の金は心配せずに良さそうだ。

（と言っても売ればだけどね。あと通貨の価値も分からないし…）

正直こんな貧弱女が「王宮のドレス」ですって差し出して信用してもらえとは思えないし、もし仮に売れたとしてもぼったくられるかもしれない。

何より売る前に道端で「へっへっへ……いいカモだぜ」なんて展開もあるかもしれない訳だ。

「というかあのメイド……」

全然関係ないけど出ていく時にメイドが「陛下、それは……」と言って黙らされていたので「こいつごときにこんな豪華な服は」ということだと思う。

「……くっそぉー」

重い体を引きずって道を歩けば、私の姿を見てギョツとしたらしい人達の視線が遠慮なく注がれる。

凄く気まずいので、私は早々に街を抜けることにした。

* * * * *

「……………はあ……………はっ……………」

全然進まない。

ていうか、迷子……………？

さつき飯屋らしきところで「すみません、外門はどこでしょうか？」と聞いたら地に頭を擦りつける勢いで「ききき北でございます……………！」と言われ、何故そんな畏まられてるのだろうと思った。

「……………道、は……………間違えてないから……………ふう……………歩く速度が遅いつ……………のね」

そりゃヨロヨロフラフラ歩いていたらそうだろう。
でも、こんなところで挫折する訳にはいかないのだ。
だって、ここで私を助けられるのは私しかないのだから。

「あの、マミヤ様……………？」

「は……………い？」

荒い息のまま振り向けば、先程城で会ったメイドが困り顔で立って

いた。

もはやギャラリーは露骨を通りすぎて私達を囲んでいる。

突然現れたメイドと、病的なまでにガリガリの私。

当然、昼時のうわさ話には事欠かなそうで何よりだ。

「その……お戻り頂けないでしょうか？　まだお体も万全ではございませんし……」

「戻る？　あそこに？　冗談でしょう？　私はあんな奴のいるところに戻りたくないです」

「ですが……　もしかして連れ戻して来いとも言われたんですか？」

「いえ、そういう訳では……」

「じゃあ、なおさら戻る必要ないじゃないですか」

「『連れ戻せ』とは言われていないのですが、別のことは……」

「別のこと？」

「はい、その……一言一句違えると言われておりますので、そのまま申しますが……」

「ああ、気にしないで下さい。私、そんな畏まられるような人間じゃないので、敬語すら使わなくていいくらいです」

「いえ、そういう訳にはまいりません」

何でもいいのだけど。

でも躍起になって言う程でもないので「そうですか」と返す。

メイドさんは「それでは……」と言うと緊張したように息を吐いた。

「陛下からのお言葉です。『その服は寝間着で、王家の紋章入りだ。当然のことながら王家の紋章を付ける者は王家所縁の者のみ。さぞかし目立つだろうな。加えて貴様はどう控えめに見ても鳥ガラ以下の死にかけた病人。いや、鳥ガラの方がまだ用途があるという物。子供でもお前を殺せるであろう。我が国は平和だが、他国からくる輩はそうではない。言っている意味が分かるか？ 自分がどうすべきかよく考える』——……以上で……いえ、けして私が言ったのではないのです！！ どうぞ怒りをお鎮め下さい……！」

「……ええ、分かってます。別に貴女に対して怒ってはいません」

顔をヒクつかせているのに気付いたメイドが大慌てで私に駆けよる。あわあわしながら「先程もこの恰好で出すのはお可哀想だと言いたかったのです！ で、ではなくて……それ以前に追い出すのはどうかと……！」と可哀想なぐらい必死だ。

「陛下は多少気が強い所がありますが、それは別に意地悪でそうしているわけではないのです。そこは是非……」

「あれが意地悪ではない？ 正気？」

「……その、もちろんです」

「陛下とやらに一言一句違えず伝えて頂けます?」

言いながら服を脱ぐ。

メイドはその光景を見た瞬間、血の気が引いたような顔で「おやめ下さい!」と叫び、必死に私を止めようとするものの、何故か「やめる」と言うだけで私には触れないので、それをいいことに出ていくとき持たされた自分の服に着替えた(もちろん、プールの時の着替えの要領で)。

「ああ、なんてこと……!」

「いい? 一言一句、間違えないで。『助けてくれたことには感謝するわ。でも貴方のいいなりにはなりたくない。ここに来てるだけで混乱してるのに、勝手に呼び出しとして自分の言い分が通ると思わないで! ついでにあんたのほどこしは受けないわ!』ってね」

助けてもらったお礼になるかは分からないけど、と言って脱いだドレスと一緒に時計を差し出す。

一応お嬢様の私は宝石がちりばめられた時計を持っていた。これはおばあちゃんに貰った物だけど、「恩をあだで返すな」というのが口癖だから許してくれるだろう。

「まあ……! いけません、どうかお戻り下さい……!」

「嫌です」

「言つなと言われているかもしれませんが、マミヤ様が『戻りたい』と言仰れば、陛下は寛大なお心で許して下さるつもりなのです。どうか、そのようなお体で意地を張らずに……」

「なんですって!？」

「も、申し訳ございません……!! すぎた真似でした……! しか
し私はマミヤ様のお体を心配して……!」

「そこはいいのよ! ありがとうございます!! よくないのはあの男! 『許してやる』って何? すつつごく偉そうなんですけど!!!」

聞き耳を立ててる人達の「だって実際偉いもんなあ」といった雰囲気、何やら居心地悪い物を感じる。

メイドは泣きそうな顔で「どうかお願いします」と言っていて、なんだか私がいじめているような気になってきた。
でも、ここで挫けてはいけない。

「私は強い女なの。助けがなくなっても一人で頑張れるわ」

ヨタヨタの姿で言った物だから信じてもらえてはないだろうけど、メイドは「マミヤ様……」と呟いて何も言わなくなった。
それを見て「それじゃあ」と踵を返す。

最後の意地で、背筋を伸ばして颯爽と歩いた。

ギシギシ軋む関節の音を聞きながら、後をついてこないメイドにホッとする。

（帰る方法くらい1人で見つける。あの狐に会えばいいだけだもの）

サーッと広がる人の海の真ん中を歩きながら、どんよりとした空を見上げてため息を吐いた。

第一章 行キツク先ハ04

「陛下……どうか御慈悲を……」

「放っておけ」

メイドがルイに時計を渡して事情を話せば、ルイはその眉間にいつもより深いしわをつくった。

チラッと時計を見て「あいつこんな上等なものを持っていたのか」と呟き、汚い物を摘むように持ち上げた。

「ということはどこぞの貴族だったのか？ どうりで気の強い……」

「陛下……お言葉ですが、もし貴族のご息女であれば異世界からお呼びしたのは問題かと……」

「貴族の娘の用途となれば嫁がせることだけだ。娘は1人というわけじゃあるまい。あのような鳥ガラが欠けたところで廃れる貴族であれば、それまでの貴族ということよ」

「……」

窓の外がかすかに光る。

分厚い雲の間が光、ゴロゴロと小さな音が聞こえてきた。

「……チッ」

王は小さく舌打ちをすると、メイドに下がるように言う。
渋々とお辞儀をしていくメイドの後姿を見て、ルイは深くため息を吐いた。

「ユン」

「はいはい、ここに」

シャラシャラとアクセサリーの音をさせて、黒とショッキングピンクのド派手な服装をした男が現れた（もしスマレが見ていたら『忍者だ！』と騒いだに違いない）。

金糸のような髪は綺麗に編み込まれており、所々に付けられた装飾が忙しくシャラシャラと音を立てる。

「あの鳥ガラを連れ戻せ」

「ええ？ いいの？ 気に入らないんだと思ったけど？」

「あの気の強さは気に入っている。後宮での争いにも負けまい」

「おや、可哀想に。あの子の自由意思は尊重しないってわけね」

「元より自由などない。ここでは俺が全てだ。異世界の人間ごときに情けは無用。あいつは俺の駒だ」

「怖いなあ」

「いいから行け」

「はいはい。すぐ戻るよ」

「それから」

「なに？　今さら言葉使いがなつてないとか言わないですよ？」

「お前の服装をなんとかしろ。それと目立つ行動は控える。前から言ってるが、お前は影のくせに目立ち過ぎだ」

「それも今さら」

ユンと呼ばれた男はおかしそうに笑うと、今度は音も無く消えた。

* * * * *

陛下の言う鳥ガラの女は、土砂降りの雨の中、野ネズミの方がよっぽど上手く雨を凌ぐだろうと思われる場所にいた。
寒さからか遠目でもガクガクと震えてるのが分かり、目は固く閉じ

て開く気配がない。

震えていなかったら死んでいると間違われてもおかしくなくらい
血色が悪く、このまま放っておけば確実に死ぬであろうことは医療
の知識がなくとも分かる程だった。

「お嬢さん、こんなところでどーしたの？」

「見て分からない？」

「死にたいのかなとしか思えないけど」

「別に……そんなつもりじゃないわ」

「メイドに合わなかった？」

「……あなたも私を迎えに来たの？」

意外と元気そうな声で返事を返していたものの、ため息を吐くと薄
っすら開けた目を再び閉じてしまう。

「ねえ、本当に死ぬ気？」

「……死ぬ？ 私が？」

もう返事はないと思われたのに、か細い声が聞こえてくる。

「死ねば夢から覚めるし、丁度いいと思うけど」

「本気でそう思ってるの？」

「……」

少し眉を寄せて目を閉じ、問いには答えない。

「僕はね、今までつまらない意地を張って死んでいった奴を大勢見て来たんだけど。キミもその愚か者どもと一緒にになりたいわけ？」

「これが意地だろうがなんだろうが別に気にしてないわ。あそこには戻りたくないだけだもの」

「どうして？」

「私の気持ちをちつとも考慮してくれない上に、利益どころか不利益ばかり押し付けてくるから。事情は良く分からないけど、自分だけ美味しい蜜を吸おうと思ってることはなんとなく分かったわ」

「なるほどねえ」

クスクス笑いながらスマイレに上着をかけると、熱を与えるように抱きしめた。

「僕は『ユンマクレガー』ルドルフカ」。みんなは『ユン』って呼ぶから、そう呼んで？ キミの名前も教えてよ。呼び名がないと不便でしょうがない」

「そう？ 初めまして、ユン。私は真宮スミレ。みんなは『スミレ』って呼ぶわ。そしてさようなら」

「さようなら？ どうして？」

「だって私は意地を張ったせいで死ぬんでしょ？」

「そうだね」

ユンは声を出しておかしそうに笑うと、スミレを抱えあげた。

「でも、キミは死なせないよ。嫌だろうがなんだろうが、あそこに戻ってもらう。意地を張って抵抗するなら、それなりの力を付けてからやるんだね。それまではアイツの所で休養するといいよ。キミは嫌かもしれないけど、これ、結構良い提案だと思うけど。懐いたと思った小猫に噛まれたら、アイツどんな顔をすると思う？ プライドだけはやたら高い男だから、相当悔しがると思うんだけど」

「……そうなの。それ最高の嫌がらせじゃないの」

スミレはフツと笑うと、今度こそ目を閉じて動かなくなった。

「寝たの？……おや、心拍数が下がってる。こりゃまずいな。早く戻らないと」

ユンは「いけない、いけない」と楽しそうに呟くと、水音を立てて消えた。

* * * * *

「ほお、どうやってこの頑固物を連れて帰って来た」

「この子、意外と単純だよ。ルイに嫌がらせする方法を教えたら、二つ返事です承したもん」

「……」

「ルイが親切にしないから」

「なぜ俺が親切にする必要がある」

「第一印象悪いつて最悪だよ？」

「今まで問題だったことはない」

「そりゃ鉄仮面だからじゃない。この子にも同じように接すればよかったのに」

そう言われ、ルイは「確かに」と思い顔をしかめた。

今まで国賓や香水臭い女達を騙してきたように、表の顔で接すれば問題無かったはずだ。

ベッドの上で死んだように眠るスマレを見ながら、ルイは自分がしくじったことにイラつく。

「さがれ」

「ハイハイ。ミリアちゃん呼んだ方が良いでしょう？」

「誰だそれは」

「ちょっとちょっと！ さっきまでここにいたじゃない。あのメイドの子！ 部下の顔くらい覚えてよね」

「何千人もいるメイドの顔なんぞいちいち覚えてられるか」

「あれはキミ付きの中の1人なんだけどね」

「……」

ジャラジャラ音を立てて歩くユニに舌打ちをし、怒り収まらない声で外の兵士を呼んだ。

「ご用でしょうか」

「ヴァンとセナを呼べ」

「かしこまりました」

兵士は礼をとるとさっさと出ていく。

鳥ガラと称した女は目覚める気配がない。

その細すぎる首に手を伸ばし、少し力を込めた。
絞めても顔色は変わらない。

「お前、こんな簡単に殺されていいのか？」

ボソツと呟いたつぶやきは、空中に溶けて消えた。

「帝国龍騎士 第一部隊隊長 ヴァン」コトウ様、一等星魔術師
セナ」ミレイ」ナスカ様がおこしです」

思ったより早い訪れに、慌てて首から手を離して振り向けば、丁度
メイドが扉を開けるところだった。

現れたのは白銀の鎧に身を包んで軍刀を腰に下げた背の高い男。

短く刈り込んだ薄紫の髪の毛が、深い紫色の瞳を際立たせている。

もう1人はゆったりとした砂漠地帯に住む民族のような恰好をした
長髪の男。

カラフルな布と装飾品をふんだんに使った服装は、薄桃色の髪と黄緑の瞳によく似合っていた。

「陛下、お呼びでしょうか」

「できれば早く用を済ませて頂きたいんですがねえ……騎龍の卵がそろそろ孵るんです」

「話はコイツのことだ。ヴァンは既に会っていると思うが……セナは初めてだったか」

アゴでベッドの上のスマイルを示せば、ヴァンと呼ばれた騎士はしばらく見つめた後、「あ」という顔をして頷く。
セナと呼ばれた魔術師は興味ありげな顔で近付き、「おや、これは酷い」と呟いた。

「何故こんなに痩せているんです？」

「恐らく召喚の時に何かあったのだろう」

「ああ、『時の壺』を通って来たのですか。あれは意地悪ですからねえ。それで、私はこの子を回復させればいいということですか」

「理解が早くて助かる。ヴァンはいいつを見はつとけ」

「……」

返事をしないヴァンを、ルイは不満げな顔で見る。

「どうした。納得いかんようだな」

「お言葉ですが……この者は本当に『黒の薔薇』なのでしょうか」

「ほお？ 俺が召喚したのに信じられないと？ この黒髪は偽物とは思えん。それに、あの王の泉に現れた。お前もそこで見たし、あの時は納得しているようだと思ったのだが。まあ、口は悪いし見た目も悪いから、お前が想像していた様な深窓の君とは言い難い。疑うのも無理はない、が——……ヴァン、疑うのは俺への忠誠が薄いからだ」

「……申し訳ございません」

「行け」

「さて、話しは済んだようですね。ではこの子は私の方で預かりますよ……おや、なんて軽いんだろ。よく生きていられたね」

未だ表情を硬くしたまま、ヴァンはスマレを抱えあげながら楽しそうに笑うセナと出ていった。

第一章 行キツク先八〇五

「おや、気付かれましたか」

目を開けたら、薄ピンクの長髪が覗き込んでいた。

「意外と早かったですね」

「……はじ、め、まして……真宮スミレです……ど、どちら様で……？」

「セナ＝ミレイ＝ナス力ですよ。この帝国で一等星魔術師をしています。一等星魔術師はご存知ですか？」

「いや……よく分かりませんが……」

「では……えー……一等星二等星……その、困りましたね。私は自分で分かっていることを他人に説明するのが下手なのですが……星の呼び名というか名称はご存知ですか？」

それならわかる。

一等星は一番明るい星だ。

「一番明るい星……あ、一番凄い魔術師ということですか？」

「ええ、まあそういうことです。話の分かる方で良かった。他の人間は私のことを『頭のおかしい魔術師』といますが、親しい人間は『セナ』と呼びますのでそう呼んで下さい」

「あ……はい……」

「お腹はすきませんか？」

そう言つて差し出されたスープには毒としか思えないキノコらしきものがたっぷり入っていて、いかにも不味そうな色あいだ。

「毒ではありませんよ。こちらで食事を取るのは初めてですから？
向こうの世界とは文化が違つてしょうから、これからも驚くことがあると思いますが」

「……頂きます」

口に入れば意外と美味しく、キノコと思われるものは何故か肉の味がした。

「……あれ？」

「どうしました？」

「いや、あの……体が……」

「ああ」

スプーンを取って気が付いた腕の太さ。

あのガリガリだった体は、いつの間にか元の太さに戻っていた。

「私は魔術師ですから」

全然説明になっていないけど、恐らくこの人……セナさんが治してくれたのだろう。

「凄いですね。ありがとうございます。まさかこんな短時間で治るなんて……」

「短時間？ いや、スミレ様が寝始めてから1ヶ月は経ってますよ。それでも驚異的な回復力ではありますが。生命の底上げ術式が施されていましたね。初めて見る術式でしたので解説に時間がかかりましたが、あまりに精密すぎて、理解した所で私には真似できそうにないので、それが『生命の底上げ術式だ』と分かった時点で解説をやめました。それを施したのは貴女の国の魔術師の方ですか？」

「いや、私のいた所では魔術なんてなくて……」

なんか、当たり前前に『魔術』と言う単語が出てきて、当たり前前に受け入れてる私……

こう言う時って動揺したり泣き叫んだりするのかなと思ったけど、な

んとなくまだテーマパークの遊び気分なのだ。

今食べてる物だって、アメリカのお菓子のようなカラフルさで、見たことないとは言え知識として知ってるのでそこまで違和感はない。

「魔術がないのですか！ それは不便でしょうに」

「いえ、元々ないので不便と思うことはないですが……それにそれを補う技術が発達してますし」

「ああ、なるほど。興味深いですね。ぜひお話を聞きたい所なのですが、ヴァンがそろそろ怒りそうだ」

「ヴァン？」

セナさんの指さす方を見れば、扉の傍で微動だにしない騎士。

鎧を着ていて「今すぐにでも戦闘可能です」と言った厳しい表情でこちらを見ていた。

「ヴァン、陛下に連絡を」

「……分かっている。その前にいいか」

「争い事はよして下さいよ。ここには貴方が一生かかったって手に入れない、とっても貴重な物が沢山あるのですから」

「女相手にそこまではしない」

物騒すぎる言葉を吐く騎士にビクつきながら後ずさりをすれば、さらに顔をしかめられた。

「俺はヴァン＝コトウだ。お前はスマレだな」

「はい……真宮スマレです……あ、す、スマレが、名前です……」

「おや、そうだったのですか。とういことは、私は初っ端から女性の名前を呼んでいた訳ですね。失礼しました」

「いえ、構いません。友達とか……は……スマレと呼ぶので、どちらでも……」

セナは「ではお言葉に甘えて」なんて笑っていたけど、目の前のヴァンは表情を変えない。

「……」

「……」

「……」

「……あの、なんでしょうか」

いい加減気まづくなって聞けば、ピクっと片眉だけ上手にあげて不

快感を示すヴァン。

「お前は……マミヤは本物の『黒い薔薇』か？」

「『黒い薔薇』ってなんですか？」

「……」

「いや、まあそうですね。住んでいた世界が違うのですから。知らないでしょうねえ。ヴァン、教えておやりなさい」

「……黒い薔薇は代々王家の妻として異世界から呼ばれる乙女のことだ。この世界には黒という色彩がない。空も夜の闇も濃紺であつて黒ではない。逆に王族は全て純白。だから反対属性である貴重な黒を得る為に、小さい頃から黒い薔薇を召喚する為に励み、召喚できた時に妻として娶るということだ。例えそれが何歳でもな。子供が生めればそれでいい」

なるほど。

あのルイとかいう男は本当に王様だったわけか。

「当然、私に拒否権はあるんですよね。別の人呼べばいいし」

「ない」

「は？」

「召喚は何度でもできる。ただ、それは黒い薔薇が現れるまでだ。それ以降は召喚そのものができなくなる。だから、どんな女が出てこようが、黒い薔薇であれば王は娶る。王家は黒い薔薇以外娶れないからな。まあ……子供が生めない場合はその限りではないらしいが……」

「1発でその黒い薔薇がでるわけじゃないですよ。金髪の方や茶色の方……色んな方が出てくるわけです。違う色の人が出てきた場合は元の世界に戻しますが……」

なんだそれ。

それでは本当にこちらの都合じゃないか。

「ふーん……100歩譲ってそちらの都合と提案を飲んだとして、嫁の方には何か利があるんですか？」

「……きつ……貴様」

「まあ、落ちついて下さい。これだから野蛮な騎士は嫌なんですよ。普通に考えたら女性側には何の利益もありません。突然家族や友人もしくは恋人と引き離された人もいるでしょう。中には喜ぶ方もいらつやったようですが……ともあれ、歴代の女王達は誰一人として嫌がった方はいらつやらなかつたようですよ。何せ莫大な富と権力がついてきますからね。もちろんそいう物に興味のない方もいたようですが、大抵は結婚するまでにお互い引かれあつて結婚していますし」

「じゃあ、私には無理そうですね。あの人、初対面なのに私のこと

鳥ガラって言ったし」

「……………!!」

何かを言おうと口を開いたヴァンを押し止め、セナは困ったように笑いながら私の頭を撫でた。

「そう言えば『時の壺』を通って来たのですね。あそこまで痩せ細ったのは初めて見ましたが……生命の底上げのお陰で助かったようです。是非術者にはお会いしたかったのですが……………」

「……………ああ、多分、狐のことですね。でも偶然会ったというか……まあ、会えないと思います」

「なるほど……………まあ、結婚までにはまだ日があります。ゆっくり陛下下のことを知って頂ければ良いかと」

「それ、本当に決定事項なんですか？ 嫌過ぎて自殺した場合は？」

「しませんよ。貴女は。必ず陛下に惹かれます」

「……………」

随分な自信だ。

ただ、気の強い私にはそれが鼻につく。

「そう言われると本気で逃げたくなるのですが」

「……それを聞いてますます大丈夫だと思いましたよ。貴女は陛下と気が合いそうだ。白の塔……この塔のことですが、そこであれば自由に動き回って良いと許可を貰ってますので、元気になったら陛下の相手をしてやって下さい。陛下にあんな態度を取るのは、貴方が初めてですから」

そう言って笑いながら、「陛下は貴女が気に入ったようですよ」とうすら寒いことを言った。

* * * * *

「別に気に入った覚えはないが」

扉を出た瞬間、壁に寄り掛かって腕組みをしていたルイが不機嫌そうに吐き捨てた。

「おや、気付いてないのですか？」

「気付くも何も鳥ガラに特別な感情は抱いていない」

「おやおや……我が主は純情でしたか……」

「誰が……！」

怒鳴ろうとしてスツと柔らかい表情に戻る。

その瞬間、数ある扉の1つから太った男が出てくる。

「これはこれは陛下。ご機嫌如何ですか？」

「ロレン殿、お久しぶりです。父と話でも？」

ルイは今までの粗暴な態度が一変して、表情も柔和な好青年に変わる。

「ええ、まあ……丁度いい。我が娘をぜひ陛下にとお話ししていた所で」

「ロレン殿、私は黒の薔薇以外娶る気は……」

「ええ、ええ、もちろんです。ただ……後宮は広いでしょう？」

「妻は1人で十分ですよ」

「……まあ、気が向いたら声をかけてくれればいい。頼みますよ」

角を曲がるまで笑顔で見送り、見えなくなってから般若のような顔に戻る。

「あのクソ親父。欲に囚われた強欲な男め」

「聞えますよ。それに誰がいるか分からないのですから。いつものように『笑顔を絶やさない柔和な純白の王』を演じた方がよいのでは？」

「構わん」

フンツと鼻息荒く舌打ちをし、この場にはいないヴァンを探した。

「ヴァンでしたら中ですよ。貴方の命令通り見張ってます」

「そうか」

「彼女と彼は仲が悪いようで」

「……そうか」

ルイは深いため息を吐くと、部屋へ入っていった。

第一章 行キツク先八〇六

「うわ、でた」

「なんだその顔は」

ルイが入ってきた瞬間、思いっきり顔が歪む。

ほぼ初対面でここまで疎ましく思う人間に出会うとは夢にも思わなかったわけだけど。

「……貴様、陛下に対してその顔はなんだッ！ 先程の発言といい、貴様は無礼すぎるぞ！！ 黒い薔薇でなければ即刻首を刎ねているところだ！」

怒りを隠そうともしないヴァンに、ルイが「よい」と肩手で制する。不満げなヴァンは未だ私を睨みつけ、鼻息荒く抜きかけた軍刀を直した。

「黒い薔薇のことは聞いたか？」

「ええ、まあ」

「ではそう言うことだ。多少体力は落ちていると思うが、これから少しずつ体を動かしてもらわねば困る。頭の固い老害どもが早くお前を見せろとうるさくてな。徹底的にマナーを叩き込んでやるから、

しつかり覚える」

「誰も『黒い薔薇』をやるなんて言っていないわ」

「お前の意思は関係ない。ただ私に従っていればいい」

かっちーん。

なんだコイツ。どこの王様？

「嫌がるようなことをされた人間が大人しく従うとでも？ 私はその『黒い薔薇』とやらをやらなくても何も困らないけど、貴方は困るのでしょうか？ であれば、貴方はもっと私に丁寧に接するべきだわ」

「き、貴様……！」

「やめろヴァン。お前の悪いところはすぐ頭に血が昇るところだ。小娘の挑発ごとき受け流せ」

「お言葉ですが、私はいつもすぐに怒っているわけではありません！ しかし、陛下のこととなれば話は別です……！」

「お前の良いところはその忠誠心だな。まあ、俺の悪口くらい受け流せるようになれ」

「……分かりました」

渋々……本当に渋々と言った感じだ。

口では「分かりました」と言っているものの、目に宿る闘志の炎は消えていない。

「お前は分からなかったのか？」

「何がよ」

「放り出されて私の助けなしでは生きていけないと感じなかったのかと聞いている」

「いいえ、感じなかったわ」

そう言った瞬間、ピクツとルイの顔が引きつった。

「感じなかったけど、あの……えーと……ユン？ キラキラした人から貴方に嫌がらせができると聞いたから、貴方の犯した大罪に見合う報復をと思って戻ってきたの。貴方の寝首をかく様な要員を平然と城に招き入れるなんて、貴方の国ってたかが知れてるのね」

「お前ごときに何ができる」

「やだ、知らないの？」

そう言っただけに置いてあった私の唯一の私物を取りだす。

何故これがここにあったかは定かではないし、こう言った物はここ

にもあるのかもしれない。

正直勝率はかなり低いけど、はったりと嫌味だけは得意なのだ。

『ピロリン』

携帯から音が鳴った瞬間、2人の男が私の想像以上に驚いて飛びのいた。

ヴァンなんかはサツとルイの前に飛び出すと、軍刀を抜いていつでも斬りかけられるよう待機する。

「ヴァン……貴方、遅いわ」

フンツと鼻で笑って携帯の画面を見せれば、2人の男は更に驚いた顔をする。

「へ……陛下が……」

「どう言っことだ……」

その台詞を聞いた瞬間、私の頭の中でファンファーレが鳴り響いた。こいつらは携帯電話を知らない……。――。

「見て分らない？ 貴方の寿命を……魂を頂いたわ。何年分かは

言わない。命が惜しくば、それ相応の対応をするのね。どうせ私は帰れないのでしょうか？ だったら、私がここで快適に過ごせるようにするべきよ」

「……ッ」

今までの余裕はどこへやら。

私を睨みつけると『なんとか』と言った感じのニヤリ笑いを浮かべた。

「……なるほど。お前は后にむいているな」

「意味が分からないわ」

「褒めているのだが」

「おい、その魂を返せ」

怒りに震えるヴァンが私を睨みつける。

それを制してルイが鼻で笑った。

「それは持っている」

「しかし陛下……！」

「よい。何も持たずにこちらへ呼んだのだ。俺の寿命くらいくれて

やる」

そう言うともまるで王様のように（実際そうなのだけど）マントを翻して出て行った。

ヴァンが私を睨みつけながら、その後を追って出ていく。

「……あの2人は……意外と馬鹿なのね」

取り合えず、私は帰れないのは確定らしい。

今のところ怖くも悲しくもないけど、怒りはある。

勝手に連れてきておいて好きかって言うなんて許さない。

助けてもらった恩はあるけど、あの時計でチャラにならないかしら……なんて考えながら、私は自分が元々来ていた洋服に着替えた。

「よし……脱走でもするか」

窓を開け放って下を見る。

下なんて見えないくらいの高さに思わず目眩がし、フツとため息のような笑いが漏れた。

「なるほど……窓から外へ出るのは無理なわけね」

さっさと諦めてドアへ移動し、ドアノブに手をかけた時だった。

ドアの向こうからかすかに話声がする。

『なあ……なんでヴァン隊長はあんなに怒ってたんだ？』

『俺が知るかよ。お前の顔が腹立たしかったんじゃないのか？』

『俺の顔が腹立たしいくらいで、俺は拳骨されなきゃいけないのかよ……』

……まあ、門番的な人くらいいるよね。

話を聞く限り、『黒い薔薇』とやらは中々貴重な存在らしい。

そもそもこの国の人間がどうしてそこまで『黒い薔薇』を求めているのかは分らない。

何か特別な力でもあるのかもしれないけど、ただのブランド志向なのかもしれない。

「そう言えば白い塔なら自由に歩いて良いつて話だったわね」

生命の底上げとは持続的に効果があるらしく、少し（結構？）寝た私はかなり元気になっていた。

それこそ鳥ガラだったとは思えないほどに。

「図書室くらいあるといいのだけど」

元気になつてまずやることと言えば情報収集だ。

もし本当に帰れないのなら生きる方法を探さなければいけないし、奴らが帰る方法を隠しているのだとすれば何か分かるかもしれない。

（と言っても図書室なんて目の付くところにあるか分からないけど……）

ため息を吐いて重厚なドアを開ける。

外で見張りの兵が動く心配がし、こっそり顔を出した瞬間、彼らの眼は極限まで見開かれた。

「も、申し訳ございません……！！」

兵は私を恐れるように頭を下げる。

「……あ、あの……どうして謝るのか分からないのだけど、頭を上げて頂けないかしら？」

「ど、どうぞお許し下さい……！ 私達は不躰に貴女様を見ることが許されていないのです」

なんだそれ。

目があったから謝られた訳か。

そう言えばメイドや医者にも土下座されたような気がする。

……も、もしかしくなくても……何も偉くない私は一生こうしてか
ずかれて生きていかなければいけなくなったのだろうか……。

「……まあいいか……あのお聞きしたいことが。今お時間大丈夫か
しら？」

「は、はい」

「白い塔は自由に歩いて良いと聞いているのですが、どこまでが
白い塔なんですか？」

「……か、壁の色で判断が付きまます。白い壁は全て白い塔です。向
こう側に赤い色が見えますでしょうか……？」

指さす方向にはダークトーンの赤い壁。

床も壁も装飾も全て白いのに比べ、ある一定の場所からそれら全て
が赤になっていた。

「ああ、あそこの……分かります」

「あそこから赤い塔です」

「なるほど」

ならば白い所は自由と言う訳だ。

「ところでこの白い塔には図書室ってあります?」

「ええ、ございます。向こうの奥……結構歩くのですが、付きあたりにございます。何かお読みになるのであれば、メイドを遣わせますが?」

「自分で行きたいんです。駄目でしょうか……?」

「い、いえ……そう言う訳では」

2人の兵士はそわそわ視線を彷徨わせながら、目配せをして明らかに困った風だった。

「自由に出歩いて良いと聞いたのですが……出ると困るのでしょうか?」

「いえ……その……」

「困らないなら勝手にしますね」

煮え切らない態度にイラツとしつつ、笑顔で会釈をする。

頭を下げたのがいけなかったのか、兵士達は大慌てで片膝をついた。その大げさな仕草に嫌気がさす。

嫌でも私が地球ではないどこかで、他人の権力を笠に生きているのだと思わされた。

「……お待ち下さい！」

後ろからかかる声に一応振り向く者の、顔をしかめて足は止めない。
兵士はひたすらよそを見ながら私を追いかけてくる。

（あれ、危ないと思うんだけど）

案の定、兵士はこけた。

「……」

ため息を吐いて兵士の元へ行く。

「貴方ねえ……兵士ならそれくらいで転ぶのはどうかと思いますけど……」

「も、申し訳ございません」

兵士はまだ私を見ない。

「目を見て話して」

「できません……」

「……貴女、何のためにあそこにいたの？」

「黒い薔薇の君をお守りする為です」

「私が敵に襲われたとして、貴方はそんなことで助けられるの？」

「申し訳ございません……」

「別に謝ってほしいわけじゃないし、守ってほしいわけでもないの。ましてや、何も無い所で2人して転んだことを攻めてる訳でもないわ」

そう言えばバツの悪そうな顔で「はあ」と言う。

どうやら若い兵士のように、頭はそこまで硬く無さそうだ。

「何を渋ってたのか分からないけど、私は図書室へ行ってもいいんですよね？」

「ええ、もちろんです。その……渋っていたのはご指摘の通り、私達が貴女様を守るか不安でしたので……言いにくい話ではありますが、守る対象を視界に入れないのは難しいのです。特に私達はまだ経験が浅い」

「では何故守る人に抜擢されたのですか？ 腕が立つから信頼されているのではなくて？」

「いや……そのお、私達はまだ子供ですから……」

「は？」

「黒い薔薇の君の対象にはなりえない……といえますか……」

……そんな心配！？

だったらじーさんでも付けてればいいんじゃないだろうか……！？

「……呆れた」

「……申し訳ございません」

確かに、よくよく見てみればかなり若いことが分かる。

「私が……私の対象が若い子だったらどうするつもりだったんだろ
う」

ボソツと言えば、目の前の2人が青ざめる。

「どうかそのようなことは仰らないで下さい……！ 私どもの首が
飛びます……！」

私の興味が王に向かなくなるのを恐れて、若い子を付けたと。
腕の立たない人間（実際にどれくらいかは知らないけど）をあえて
つける所を見ると、この白い塔と言うのは相当安全な場所らしい。

「もういいです」

ため息とともに歩きだす。

安全と分かればこの2人が付いてこようが来なかりうがどうでもいい。

後ろから「お待ち下さい」とかなんとか焦ったような声が聞こえ、
一応困りながらも付いてきているのが分かる。

私は「まさかこの先ずっとこんな感じでトイレまで入ってこられる
のでは……」と思いつつ、小さくため息を吐いた。

第一章 行キツク先八〇七

「右！ もつと右！」

「右……ですかっ……う重っ」

「ちょっと！ 重いつて言った！？ 今、重いつて言ったの！？」

「ち、違いますー！」

2人は私よりもだいぶ年下だった。

茶色の短髪がジェレミーで、薄い緑色の長髪がニコラス。

「もー！ ジェレミーもうちょっと……背伸びして……！」

「む、無理ですよぉ」

そして、私は今……ジェレミーに肩車をしてもらいながら、高い所の本を取っていた。

「スマイレ様ぁ……やっぱり踏み台探しましょうよぉ」

情けない声で、ジェレミーを支えるニコラスが言う。

先程肩車と言ったが、正確に言うと手と膝をついたニコラスの上に

ジェレミーが立ち、そのジェレミーが肩車をしているのだ。
正直無理がありすぎる体勢なのは分かってる。
でも、踏み台がないし、そうした方が丁度いい高さになるのだ。

「ニコラス！ もう少し頑張ってね！」

「は、はい……！」

2人は恐ろしく従順だった。

まあ、私の立場的な物もあるのかもしれないけど……。
まず私を名前で呼ぶことを強要し、砕けた口調で話すように言った。
断られたけど、何とか妥協してこの状況だ。

「一体……なんの本がっ……くう……」

「あと少し……！ あそこのっ……『歴史書』を」

グツと手を伸ばした時、図書室の扉が大きな音を立てて開いた。
扉は壁にぶつかるバウンドして跳ね返る。

その跳ねかえった扉をイライラとした感じで押しつける男……ルイ
が般若のような顔で立っていた。

「へ、陛下……！！」

「何をしている」

「見て分らないの？」

「見て分かることは聞いてない」

「じゃあ何も言えな……わっ！？」

自分が使える主がどれくらい怒っているか見ようとしたのだろう。
身じろぎしたニコラスの上でバランスを崩したジェレミーが、グラ
ツと揺れた。

そして、驚きに目を見開いたルイが視界に入る。

「……あっ」

私はステンドグラスを突き破って外に投げ出された。
地上は遥か下。

私が寝泊まりしていた部屋と同じ階にある図書室の窓から外に出れ
ば、空でも飛べない限り確実に死ぬコースだ。

「スマイレ様！！」

ドタツと床に落ちるジェレミーを見て、「彼が外に飛び出なくて良
かった」と思った。

こちらに駆けてくるルイがやたらゆっくりに見えて、思わず笑う。
キラキラ降り注ぐ色とりどりのガラス片を見ながら、私は「今度こ

そ夢から覚めますように」と祈っていた……。――

「スミレ様あ！」

「ええ！？」

夢物語はこれで終わりだと思った。

……思ったのに、割れた窓ガラスを超えてニコラスが私を追ってくる。

そして私に追いついたニコラスは、私を抱え込んで震える声で謝った。

「申し訳ありません……！！ スミレ様……！！！」

「馬鹿！ 何で来たのよ！！！」

「スミレ様、よく聞いて下さい。下に湖が見えますか？」

「え！？ あ、ああ……あれね」

「着水時、私が思いっきり上に投げますから。できるだけ体を丸めて下さい」

「え……？ そ、それって……」

「さあ、早く！ 高いとはいえ、落下速度は遅くない」

仮にそうしたとして、この恐怖でガチガチになりながらも無理矢理笑っている青年はどうなる。

「駄目よ!」

「お願いですから言う通りにして下さい!」

「駄目! そんなの許さない……!」

あのアホ狐は私の生命力を底上げしたと言った。

数カ月分、飲まず食わずで生きていたのだ。

であれば、もしかしたらこの高さでも死なないかもしれないではないか。

少なくとも、この青年よりは命が頑丈なのだから。

「抜け駆けするなんて許さないんだから!」

「違いますから……!」

ニコラスは必死だった。

私も必死だった。

たぶん、はたから見たら私達は揉み合っているように見えただろう。

「はなっ……し、なさい!」

「お願いです……！　お願いですからスマレ様……！」

地面はどんどん近付いてくる。

「私の夢の中で、人が死ぬのは許さないわ……！」

もう夢だなんて思ってたなかった。

というか、最初からなんとなく気付いてはいた。

でも、だからこそ……今、ここでこの震える青年を死なせるわけにはいかない。

この人は、私が守る……。

「スマ……」

例えるなら落下傘が開いたような。

バンだとかボンと言った音がなり、急激に落下速度が低下した。

それと同時に肩甲骨に激痛が走り、真っ赤な血飛沫が上がる。

そうして、私の意識はブラックアウトした。

第一章 行キツク先08（前書き）

| L u i S i d e |

第一章 行キツク先08

落下して行くスマレと青年兵を見た瞬間、心臓が止まるかと思った。追いかけていく青年兵を見て、どんな状態でも命を張って対象を守ろうとする行為に満足した。

ただ、満足を上回る怒りがそれを全て無かったことにする。

舌打ちをして窓に足をかければ、もう1人の青年兵が青ざめた顔で「おやめ下さい！」と止めた。

「離せ!!」

「陛下、どうぞ落ちついて下さい!!」

怒りに任せて青年兵を殴り倒せば、本棚に撃ちつけられて動かなくなった。

もう一度窓から身を乗り出した時、俺は信じられない光景を見る。

「……馬鹿な」

遙か下の方、豆粒くらいの大きさのスマレの背中から美しいステンドグラスの様な蝶の羽が生え、風圧に耐えきれず千切れて血飛沫を上げた。

そうしてそのまま2人は湖へと落ちる。

「……あいつ、は……」

ヒラヒラと舞う千切れた羽は、パツとはじけて空中に消えた。

第二章 黒い薔薇の君 01

「……」

気が付いたら夕暮れで、背中の痛みから意外と早く目が覚めたのだと分かる。
うつ伏せのままふと横を見れば、あのメイドが心配そうに私を見ていた。

「ご気分は如何でしょうか？」

「……背中が痛いくらいで……」

「ですよね……」

「……あの、お名前をお聞きしても……？」

誰かが言っていた様な気もするけど、どうしても思い出せなかった。メイドは恐縮しきった感じで「ミリアと申します、スミレ様」と言う。

「ミリアさん」

「どうかミリアとお呼び下さい……」

「だってミリアさんの方が年上ですよね？」

「ですが、私はただのメイドでございます」

「……みんなそんな感じなんです」

「……え？」

「みんな私を偉い人扱いするんです」

その顔は「だって偉いんだもん」と言いたげであつたけども、私はそれを無視しながら無理矢理涙をひねり出して訴えた。
ここだけの話、これであの青年兵2人も陥落させたのだ。

「私……いきなりそんな扱いされて……家族とも友達とも引き離されて寂しいのに……少しでも色んな人と仲良くなりたいのに……みんな私を避けるからッ……」

ぐずん、とか言ってみちゃったりなんかしてね。

正直気持ち悪いくらいの猫かぶりである。

しかも、『みんな』とか言いつつ出会ったのはミリアと青年兵2人、偉そうな王様に変な民族衣装とぶっきらぼうすぎる騎士、それとシヤラシヤラキラキラした変わった男だけだ。

しかも偉い人扱いしてくれるのはこのうち3名だしね。

「……で、では……その……公の場意外でしたら……」

「本当！　ありがとう、ミリアさん！　私のことは好きに呼んでいいですから！」

アハハと満面の笑みで言えば、「まさか騙された……？」とこれまたあの青年兵達と同じ表情をした。

「ところで何で私の背中はこんなに痛いんですかね」

疲れたようにため息を吐いて呟けば、「え？　自分のことなのに知らないの？　マジで？」と言った顔をされた。

この世界の人は、考えていることが分かりやす過ぎる。

「その……大変言いにくいのですが……」

「え？　あゝ大丈夫です。大抵のことでは怒らないし驚きませんから」

「はあ……」

信用してなさそうな顔。

ミリアはしばらくモゴモゴ何かを呟いた後で、小さくため息を吐いた。

「スミレ様、黒い薔薇の君のことはどの程度ご存知ですか？」

「これっぽっちも」

「なるほど……分かりました。細かいことは私も存じ上げないのですが、黒い薔薇の君は蝶のような羽を持つと言われています」

全く分からないのに「なるほどね」と相槌を打てば、ミリアは満足げに頷いた。

「羽の色はそれぞれですが、大抵の方はご気性に沿った色を出すとされています」

「気性？」

「はい、例えば……そうですね、簡単に言えば情熱的な方は赤色の羽だと思って頂ければ」

なるほど。カレー好きな人は黄色と言うことか。

さてよ。つまり、私が本当に黒い薔薇の君とやらであるのなら、私にも羽があったというわけで。

羽が生えるだろう位置が凄く痛いというのは、恐らくその羽を怪我したか何かしたのだろう。

まさかこの年になって背中から羽が生えてくるとは思いもしなかったけど。

「それで、私にもその羽が？」

「はい……スミレ様は、間違いなく『黒い薔薇の君』でございます」

頷いたミリアは、すぐさま顔を曇らせ、再びため息を吐いた。

「ですが……」

ミリアが再び口を開いた時、ノックも無しにドアが開く。

そこに立っていたのは、怒りで表情を硬くした堅物王だった。肩を怒らせて不良のように歩いてくる。

そしてベッドのわきに椅子を引き寄せたかと思うと、どっかり座りこんで窓の外を眺め始めた。

「……お前が黒い薔薇の君だと言うことは認める。羽が生えていたしな」

やっぱりあの時の……あの落ちている最中の違和感は羽だったのか。なんだか何でもありな気がしてきた。

正直驚きなんて何もないし、夢じゃないのは分かっているけど夢見心地だ。

「しかし、どうだ？ お前の無謀で愚かな行為によって、羽は千切れ、消えてしまった」

「無謀で愚かになって……え！？ 千切れて消えた！？」

待つてほしい。

千切れて消えた……？ あの血の吹き出しはそういう理由だったのか。

なんかあまりに痛いし血が出たような気がするしで嫌な予感はしていた。

ミリアだって表情が曇ったままだし、何より凄く言いにくい事なんだけど……って雰囲気がプンプンしていたし。

しかし、しかしだ。

どうせ異世界に行ってファンタジックな世界に投げ出されたとしてよ。いや、もうそうなっているのだけど。

そうなってまず期待する事は？

魔法が使えること、獣耳のはえた人間との交流、色とりどりの髪色……その中でも翼なんて最上位を占める程（私としては）の条件ではないだろうか。

仮にそれが鳥的な翼じゃ無かったとしても、蝶であればまだいいや、むしろ蝶が好きな私としてはプラスだ。

それに、人類は未だ空を飛ぶことを夢見ているではないか。なのに、なのにだ。その羽が取れた……？

「凄く……痛かったですけど……」

「根元から千切れたからな。痛かろう」

「は、生えてくる！？」

涙目で胸倉をつかめば、焦ったように「やめんか!」と言ってルイが私の手を外そうとする。

「生えてくるかどうかは知らん! なぜなら、過去類がないからだ……! くそっ! 馬鹿力め!」

「嘘でしょ……! 何でそんなことに……羽ってそんなもろいものなの!? もっと深く根付いているものじゃないの!? あ、ニコラス! ニコラスは!？」

「うるさい……女だ! は、離せ! あいつは生きている。これから死ぬがな」

フンと鼻息荒く襟元を直すルイを、私は思いつきり殴った。

「なんで?」

「お前は手を出す前に……それでも女か!」

「理由を言いなさい!」

背中ジクジクした痛みを堪えながらルイを睨みつければ、「忌々しい」といった言葉がぴったりなほど顔を歪めたルイが口を開く。

「黒い薔薇の君を傷つけたからだ」

それだけ。たったそれだけだ。

それだけのことで、死ぬ羽目になる。

不敬罪とかいうやつだろうか。

なるほど、異世界とは――……。

「理解できるか……！ それだけで死ぬわけ！？ あんた、馬鹿！
？」

言いたいことはもつとあった。

でも、全て言い切る前に、私は部屋を飛び出していた。

ニコラスがどこにいるのか、ここがどこなのかも分からないまま。

第二章 黒い薔薇の君02

「馬鹿は完璧に私でした……」

傷が痛い。

何故あの魔法とやらでピピツと治してくれなかったのだろうか……。おまけに考え無しに出てきたものだから、完璧に迷子だ。

取り合えず、罪人（こう呼ぶのは不本意だけど）が捕らえられている場所と言えば高貴な人間……王様が住むような建物とは別の塔にあるはずだ。

なおかつ、日陰でジメジメした場所。

そう、例えば地下室や別棟。

「あそこのような気がするわ」

視線の先にははるか下に見える石造りの塔。

窓らしき場所には鉄格子がはめられており、いかにもな場所だった。しかも森の近くだし、日陰にあるし、誰も寄りつかないそうだし。

「さて、問題はどっやっており……」

「いたぞ！ 保護しろ！」

声に驚いて振り向けば、とても善良な市民を保護するようには見え

ない武装集団。

私は、再び全力疾走するはめになった。

「あん、たら……！ しつこいつてのよ！！」

「お止まり下さい、スマイレ様！！！」

相手は鎧を着ているというのに、誰も息ひとつ切らしていなかった。それどころか今にも私に追いつこうかとしている。

「冗談じゃないわ！ 私はニコラスに会うのよ……！ こんなところで……捕まって、られないんだからっ」

「くそっ」

え、何？ 「くそ」ですって？ 私に「くそ」って言ったの？
ねえ、仮にも私ってば王様の嫁候補なのでしょう？

いえね、別に権力をかざすわけじゃないの。だってそういうの嫌いだし。昔、部活の先輩が……ってこれはいいか。

私が言いたいのは、初対面の人間に対して失礼だと思わないかってことよ。

確かに私はこの人達の仕事を無駄に増やしているのかもしれない。でも、私のやっていることが無駄だとは思わないわけ。これっぽっちもね。

だから……。――……。

「私を怒らせたらどうなるかを知るといいわ……！」

「え？ なん……うわ！？」

急に減速してしゃがみこむ。

兵士は勢いを止められず、私に躓いて転んだ。

後ろから来ていた兵士達も漫画のように躓いて転んでいく。

私はいえ、さつさと抜け出して兵士達が転んでいくのを眺めた。最後の1人が踏ん張りきれずに転んだのを見計らって、私は満面の笑みで扉に手をかけた。

「小娘相手に油断しないことよ。兵士であれば周りを良く見なさい」

彼らの敗因は私が小娘だと侮って、状況把握を怠ったことだ。

だから、私が何かを企んでいることに気づかず、こんなことになってしまう。

慌ててこちらに伸ばす手を振り払い、私は扉を閉めて鍵をかけた。

南京錠のようなそれは、ガチャリと金属音を響かせる。

誰が鍵を持っているのか知らないし、鍵があるのかどうかも知らない。でも大事にはならないだろう。なんせこんなところに引っ掛けたままにされていたくらいだ。

万が一のときは、扉をはずせばいい。

もしかしたら壊れるかもしれないけど、王であれば余りあるほどの金があるはずだから、これくらいは別にいいだろう。

血税とか言うのであれば、ポケットマネーから出せばいい。

「さて、冒険の始まりよ」

目の前には長く続く廊下。

その端つこには階段らしきものが見える。

とにかくあの塔に行くのには下に下りる必要がある。

目標は石造りの塔。

「命の恩人を傷が痛いからといって助けないのは間違っているわ。まして、危険な目にあわせたと責任転嫁して殺そうとするなんてもつてのほか」

あの哀れな男は人との絆の大切さを知らないに違いない。

国というのは人ありきだ。

たった1人で無人島を買って「私は王様だ」と宣言したとする。

確かにその人は王様かもしれない。この場合、王様が管理する人は1人だけ。つまり自分だ。非常に楽だろう。

ただ国かというのだろうか。

もし法律的に認められているとしても、常識的に考えてただの無人島の管理者だ。

国というのは人が無数に集まり、初めて動き出す。

そこからどう発展するかは王次第。

頭が愚かでは、その国の行く末は決まっているというものだ。

だから私は、王であれば王らしく振舞う必要があると思う。どれが正解かは分からない。ただ、私の人道ラインを大幅に超えるようなものは、絶対に認めたくない。

「例えばそれが今よ」

私は、自分で友と認めた人を決して見捨てたりはしない。
例えばそれで自分が窮地に立たされることになったとしても、
だ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「……」

あれだけ偉そうなことを言ったものの、私は怪我人である。
挫けそうになったっていいじゃないか。

「し、しんどい……」

絶賛へこみ中。

両手両膝を突いてハアハア。

何階分階段を降りたのだろうか。

ようやく付いた頃には、すっかり日が暮れていた。

ここまで一本道。不思議なことに誰にも会わなかった。

もしかして警備が甘いのではないかとも思ったけど、王宮でそんなことはありえないはずだ。
何かの罠かもしれない。

「ひ、膝が笑う」

震える膝を叱咤して、私は石造りの塔へと近づいた。
そのときだった。

「そこまでだ」

振り向けば腕組みをしたルイ。

「なによ」

「それ以上先は行くなと言っている」

「……ここにいるのね」

ギツと睨みつければ、ピクリと動く眉。
正直、この男の怒りのバロメータは眉毛を見れば分かると思う。き
っと本人は気づいていないと思うけど。

「そこにはいない」

「よくもそんな白々しい……」

「いないと言っているだろうが！」

怪しい。だいたい子供っていうのは凶星を指されると逆上するものだ。

この男だつてそのくちに違いない。

「その態度、怪しすぎるわよ。だいたい貴方……」

「いいから来い！」

「ちょっと……！！ ひっぱらないでよ！ 痛っ……」

背中が激しく痛んで思わずうずくまる。

引きずられる形になって、ようやくルイが止まった。

睨みつければ困惑した表情でオロオロしている。大の大人がオロオロする様は実に滑稽だ。

「傷が痛むわ」

「す、すまない」

「歩けないわ。痛くて」

「……すまない」

どうしよう——……。

顔にそう書いてある。

本当に分かりやすい男だ。周りをキョロキョロ見渡して、誰もいないと分かると明らかに困った顔をした。そうしてため息を吐くと私に近づく。

「触るぞ」

小さく呟いて抱き上げ、できる限り背中に触れないようにと配慮している。

正直感動した。うっかり「あら」なんて乙女チックになっただけくらいだ。

「ニコラスに会わせて」

「駄目だ」

「会いたいの」

「駄目だ」

「お願い、会わせてよ」

「……」

どんどん急降下する機嫌。

しかし、こんなところで挫けるわけにはいかない。

「ねえ、会いたい……」

「どうしてお前はそんなにあの男に会いたいんだ!!」

あまりに突然大声を出すものだから、ビックリしたじゃないか……。ぽかんとしながらルイを見れば、カッと赤くなってそっぽを向いた。

「すまん……別にそんな大声を出すつもりはなかった。ただ、お前が重いから圧力がかかって、想像以上に声が……」

「重い!? 私が!？」

「あ、いや……!」

「もう離してよ馬鹿!」

暴れる私を押さえつけながら「コラッ」と怒る。
いよいよ取り落としそうになったとき、シャラシャラと金属のすれる音がした。

「ハイハイ、そこまで。そーんな意地悪しないの」

ユンだ。あの派手な男が苦笑しながら歩いてくる。

「元々会わせる気だったくせに。どうして殺すなんて嘘ついたのさ」

「は？」

今なんと言った。嘘？

サツと上を向けばサツとそらされる視線。

凶星だったらしい。

この男は本当にわかりやす……じゃなくて！

「嘘？」

「いや……」

「嘘だったの？ 嘘ですって……？」

「そそ。すぐ諦めて戻ってくるかと思ったけど、ずいぶん頑張ったねえ」

ブツブツと「だから」とか「ようするに」とかわけの分からないことを言うルイ。

誰も追いかけてこなかったのは、そういうことだったのか。
私が諦めると思ったと。
つまり私を侮ったわけだ。

「……私はねえ……侮られるのが一番嫌いなよ」

「そんなつもりではなかったのだ」

サツと携帯を取り出して2人を写す。
機械音がなった瞬間、ルイの顔がサツと青ざめた。

「え？ 何々？ 今のなに？」

「……ユン、魂を取られた」

「は？」

その狼狽振りにニヤリと笑う。
愚かだ。無知とは恐ろしい。

「ええ〜？ マジで言ってるの？ 魔術師だったんだ？ へえ〜……
…え、マジで？」

「さあ？ どうかしら」

私はニヤニヤ笑うと、「ねえ、マジで？ マジなの？」と笑いながら焦るユンを見ながら、満足げに両手を差し出した。

「さあ、抱っこして。傷が痛い。連れて行ってくれるのでしょうか？ ニコラスに会わせてよ」

引きつった顔をする2人の男を眺めながら、私は満足げに鼻を鳴らした。

第二章 黒い薔薇の君03

「あ、どうもー」

「……」

「傷大丈夫でぶへあっ!？」

炸裂。私の黄金の右手がニコラスの柔らかさうなほつぺたにめり込む。
想像以上に柔らかいそれは、かじりついたらさぞかし美味しいだろう。

「何をやっているのだお前は……!!」

珍しく正当な理由で怒るルイ。
ユン何かも「ええええええ!!」とツツコミの体勢だ。

「あんた何のんびりしてんのよ!!」

「だ、駄目ですか!? 今、休憩中なんですけど……!!」

駄目だろう……! 駄目に決まってる!
てつきり良心の呵責みたいなものに押しつぶされそうになってるに

違いないと思っていたのにだ。

お茶飲んでふんぞり返ってるって何!?

いや、別にニコラスは何一つ悪いことしてないんだけどね!?
で、でも……でもさあ!

「何でそんなに元気そうなのよう!」

「ええ!? ご、ごめんなさい」

「元気なのは良いことであろうが……」

呆れたような声を出すルイにようやく気づいたらしいニコラスは、

「ひあ」とかわけの分らない声を出してかきずいた。
頭を垂れて微動だにしない。

「へ、陛下……この度は……」

「よい、気にするな。この女の自業自得である」

「ちょっと!」

自業自得って何だ。

というか、貴方猫はかぶらなくていいの?

年下には強く出るってか。この心の狭い男め。

大体私は……いや、待って。完璧に自業自得だ。

「あれ〜？ スミレってば今更自己嫌悪になってるわけ？ ん？」

「やめて……えぐらないで……」

顔を覗き込んでくるユンを押しのけ、小さくため息を吐いた。

何はともあれ、この若すぎる子が死ななくて良かった。

そもそも羽なんて元々は私にないオプションだ。

空を飛んでみたいとか願望はあったけど、何かで空を飛ぶ為には例え背中に翼があったとしても胸筋が2メートル必要だと聞いた気がする。

「まあ……無事でよかったわ……ニコラスみたいな若い子が死んでしまっっては、この国の大切な財産を失うことになるもの」

「……スミレ様」

ニコラスは痛ましそうな目で私の背中を見ていたかと思うと、目に涙を浮かべた。

「スミレ様……私は」

「泣かないのよニコラス。私の祖母は父に『男は首が取れても泣くな』と言っていたわ。それが正しいかは分からないけど、涙は別のところに取っておきなさい」

ちよつとくさかったかななんて思いながらニコラスの頭を撫でていれば、ニコラスは急にパツと表情が明るくなって、照れくさそうに笑った。

「スマレ様、私はこれ以上後悔しない様に生きて行きたいです。もし、もしもお許し頂けるのであれば、貴女を守る騎士になってもよろしいでしょうか？」

「……き、騎士！？」

ちよつと待つて欲しい。

確かに異世界……つまりこういうヨーロッパみたいところでは騎士は王道だろう。

王道だし「良いなあ」なんて思ったこともある。

でも実際問題本当にこの国で騎士が必要な自体が起こるとしたら、ニコラスは私が落ちた時のように命を張って私を助けるだろう。であれば答えは1つ。

「嫌よ！」

その瞬間、みんなが一斉に「ええ！？」って顔をした。ありえない、といった表情のまま、断られたニコラスを「可哀想に」と慰めるユン。

「お前は薄情な女だな……確かに若輩だから機能性は悪いが……大抵の女は一度命を懸けて自分を守ろうとした騎士であれば、喜んで迎え入れるぞ……」

「そーだよ？　しかもほら、こんな若くて可愛い子いないって。まだ12歳だよ？　それに、女王陛下であれば騎士は何人いてもいいんだからさ、取り合えず試しに使ってみればいいじゃない」

「あのねえ……使うとか使わないとかそういう人を物みたいないえ、何ですって？」

なんか凄い台詞が聞こえた気がする。

「え？　女王陛下であれば騎士は何人いてもいい？」

「そこじゃないわ。12？　ニコラス、貴方12歳なの……？」

「え？　あ、はい……」

なんだと……！

19歳くらいかと思っていたのに……！！
何この落ち着きようは！　近所の糞ガキなんか同い年くらいのころ私に虫を投げつけていたというのに……！

「そ、そんな……私はてつきり……騎士？　え、でも……騎士って……騎士って言うのは誰でも取れるの？　兵士であればお金持ちが

自由に選んで？ え……？」

「落ち着け。何が言いたいのかわからん」

呆れたような声を出すルイに、ユンはおなかを抱えて笑った。

大量のアクセサリをチャラチャラ鳴らしながら、おかしそうに口を押さえる。

「まあ、騎士って言うのは何でも屋さんかな？ 大抵はお金持ち用の用心棒であったりするけど、メイドや執事みたいなことをやらせる人もいるね」

騎士なのにメイド……？ という顔をしていたら、ユンが「ほら、うちは平和だから」と笑った。

平和なのは良いことだ。なのに、「つまんないよねえー」と言いながら笑う。

それが冗談なのか本心なのか、私には分からなかった。

「騎士協会つてのがあってさ、普通はそこから人材を選ぶってわけ。で、小さくて可愛い兵士もたくさんいるわけよ。うちの国ってば優秀な人材が多いから、年齢は関係ないの」

なるほど、ゲームで言うところの職業斡旋所みたいなものか。そこで自分の使えるご主人様を探すというわけだ。

「でも近年問題が起こっててねえ……そんないたいけな少年少女どうなるかは火を見るより明らか。相手は自分より立場が上で、小さな兵士達はまだサラっとかわすほど年を取っているわけでもない」

分かるよね？ といった感じに笑うユン。

いかん、これはいかん……！

つまり、暇を持て余したおば様やおじ様の餌食になってしまいうことだ。私の命を助けてくれたこのいたいけな少年が、そんな目にあってもいいものだろうか？

でも、私は人を従えるほど偉くもないし、お金もない。

それに、自分の命が助かる為に他人の命を犠牲にしているとも思っていない。

「ねえ、ユン。なんとか……」

「なぜお前は俺に頼らない」

「頼れるような男だったらとくに頼っているわ。そう言うことがあるってことは、対応し切れていないってことでしょう？ 王として恥ずかしくないわけ？」

そういった瞬間、ムツとした表情でルイが私をにらみつけた。

「今、対処中だ」

それはもう言い訳にしか聞こえなくて、とにかく目の前の泣きそうなニコラスしか見えていない。

なんだか見れば見るほど可哀想になってきた……。

もしこの命の恩人が……と考えると吐き気がする。

「ねえ、ニコラス……私のために命は張らないで。約束できるならお友達になるわ」

「友達じゃなくて騎士なんだけどね」

「ユンは黙っててよ」

ニコラスは明らかに動揺しながら、それでも小さくうなずいた。ルイは不満げに鼻を鳴らしたものの、一応私の意見を尊重してくれるらしい。

「スマレ様、いつか貴女に『守って欲しい』と思われるような男になります！」

目をキラキラさせるニコラスが可愛くて、思わず抱きつこうとした時だった。

私の襟首をがつつりつかみながら、ルイがフンツと鼻で笑う。

「ニコラス、この女は情にもろい。言ったとおりだっただろう？」

「は、はあ……」

困ったような表情を浮かべるニコラス。
ブーッと噴出すユン。

「も、もしかして……」

「この俺がそんな犯罪見逃すわけがない」

なんかね、なんか違和感を感じていたのよ。

猫かぶりのルイがニコラスに対しては普通だったんだもの。

まあ、そうよね。嫁の騎士はそれすなわち自分に近い部下。部下になるなら表の顔でニコニコしてなくてもいいものね。

全て裏で計画していたってわけ。みんなに騙されていたのね、私。

ニコラスまで私を騙すなんて思わなかったけど。

——……そう、そうなの。

「絶対許さない」

「あ、ヤバ……」

ユンがそう言いかけて逃げようとした瞬間、それよりも早く私の手が動く。

辺りに間拔けなシャッター音が響き、2人の大男が青くなった。

「あちゃー……魂獲られたの2個目だあ」

「俺なんか3つ目だぞ！！　というか貴様、王である俺を置いて逃げようとしたな……！」

「え！？　た、魂……！？」

状況がなんとなく分かってオロオロしだすニコラス。
小さく「魔術師だったのですか？」と呟いている。

「ニコラス、覚えておきなさい。貴方のご主人様はとても心が狭くて根に持つのよ」

サツと顔を青くしたニコラスは可愛い。
ここは年上として可愛がってあげなければ。

「これからよろしくね？」

第三章 孤高の王女01

「ちょっとトイレに行つてく……あ、ついてこなくていいから。悲しそうな顔をしては無駄よ」

ちよつと甘やかすとお尻まで拭いてこようとするのだ。

最初は「異世界つてこういうものなんだ」とか「郷に行つては郷に従え」とか思っていたけど、最近ようやく「やっぱりこれなんかおかしくない？」と気付いた。

「は〜どっこいしょ」

無駄に広いトイレ。

いつになつても慣れることはなく、ソワソワしてしまう。さつさと用を済ませてモノを流し終えた時だった。

「久しいの、小娘」

「ぎゃあ!？」

心臓の辺りを押さえて飛びのく。

外から焦つたように「如何なさいましたか、スミレ様!？」と聞こえるが、「何でもないのよ! 虫よ!」と叫んで、トイレから顔だけ出して「虫……?」と顔をしかめる狐を睨みつけた。

「……今さら何の用よ」

「随分なご挨拶よ。せつかく朗報を持って来てやったと言うに」

「朗報？ 何、帰れるわけ？ それ以外は朗報とは呼ばないわ」

「では残念なお知らせである」

「……」

こいつ何の悪びれも無く……一体何のために出てきたというのか。そもそも自分のせいでこんなことになっていると、これっぽちでも思ったことがるのだろうか。いや、ないだろう。

「よいか、小娘。これより先、我と連絡を取りたいと思った時は、便所へ向かって声をかけよ」

「嫌よ」

即答したのが気に入らなかったのであろう狐は、再び顔をしかめた。しかし、私にだってプライドというものがある。

どこの世にトイレに向かつて相談事をする女がいるというのだ。

「便所に向かつて話しかける程、落ちぶれちゃいないわ」

「便所ではなく、話すのは我である。声をかけるのは、あくまで挨拶。よもや挨拶も無く我と話を始める程、愚かな人間ではあるまい？」

「便所に向かつて挨拶する事は愚かじゃないというの？ 傍から見たらどうみても愚かだと思っわ」

「分からぬ人間よ。便所ではなく我に挨拶を……」

「あんたは便所の神様なの？」

「……何？」

狐は不機嫌そうな声を出した。
しかし、所詮は狐。
ちつとも怖くない。

「便所が気に入っているの？ 何故いつも便所なの？」

「気に入っているわけではない。たまたま便所なのだ。もうよい。
話にならんようだから用件のみ言うぞ。困った時は便所に向かつて『我、人にして人にあらず。時の狭間を切り裂いて、来たれ来たれ狐の王よ』と言え。さすれば、馳せ参じよう」

「貴方が来て何の意味があるか分からないけど……もし、もしもよ？ もし、貴方に感謝をするような情報を与えてくれると言うのであれば、私は深々と頭を下げ……」

「1つ良い情報だ。純白の王がもつじきその扉を蹴破る。尻をしまえ」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げて礼を言った瞬間、扉は蹴破られた。

事前に情報を得たとはいえ、若干遅かった。

若干遅かったが為に、私はパンツを上げることしかできなかった。

「貴様という女は……」

「ちよつと間が悪かったから、不思議な光景を見る羽目になっただけだわ」

狐の口に押し込んでやろうと思って大量に手に取った消臭剤。

その姿勢のままパンツに手をかけながら便所を覗き込んだ私を、まるで汚物を見るような目で見ているルイ。

後ろのメイドも「こいつ、頭は大丈夫だろうか」と言った表情だ。

「何をしている」

「見て分からない？ 狐と話していたの」

「な、何？」

「狐よ。私がここに来る原因となった狐」

ルイは憐れむような表情をして、小さくため息を吐いた。

ブツブツと「少々きつくしすぎたか」等と言ってはため息を吐き、顔を両手で覆って再度深くため息を吐いた。

そして勢いよくメイド達の方を振り向くと、鬼のような形相で低くつぶやく。

「何か見たか？」

「い、いえ、私どもは何も見えておりません」

「では、持ち場へ戻れ」

メイド達はサツとスカートを持ち上げて挨拶をすると、音も無く去っていった。

「私はお前が思いのほか弱い心を持っていることに失望している」

「待ちなさいよ。別に頭がおかしくなっただけではないわ」

「じゃあどうしてそんな愚かな事を言い出すんだ!!」

「やっぱり愚かだと思っわけね!?!」

私は「あの狐にもそうだと言ったのよ!」と叫びながら、トイレのふちに手をかけた。

「我、人にして人にあらず。時の狭間を切り裂いてええええ……!
!? ちょっとルイ! 引つ張らないでくれるかしら!」

「やめろ! 私が悪かった!」

「本当なんだってば!」

「やめてくれ! どこにトイレに向かって叫ぶ王女がいる!」

最低。こいつ、私の頭がおかしくなったと思っっているんだわ。
何その憐れみに満ちた表情。
私が背中を怪我したり、ガリガリに痩せた時にも同じ顔をしてほしかった。

「とにかく、今日はゆっくり休め。戸の前にニコラスを置いておく。
用があったら、狐ではなくニコラスを呼べ。いいな」

「だから……」

「いいな!」

「……分かったわよ」

別に信じて欲しいなんて思っていないもの。

だから……。

「愚かな女よ」

「狐てめえ——！！　　ルイ！　こいつよ！！　この狐が私を……」

私の声に小さく飛び上がって驚いたルイは、慌てて私の指さす方を見る。

そして、顔をしかめた。

「……ただの便器だ」

「……うつそ……いるのに」

「人にして人にあらず。それがお前の立ち位置よ。だから我が見える。その王もまた人にして人にあらず。しかし存在する世が違う。だから我が見えぬ」

「……」

斯くして、私は1日ベッドで安静にするよう命じられた。

第三章 孤高の王女02

まあ、そんなんで大人しくなるわたしではないのだけど。

まだ白い塔は散策しきっていないわ。

扉の外にはニコラスがいる。私が出ていけば、安静を命じられている私を止めるだろう。

であれば、出口は1つ。

「そこら辺のお姫様と同じに見ないで頂きたい、ものっ……ね！」

雨どいに足をかけて屋根へと昇る。

私に出来てしまうくらいだから、侵入者がいるとしたらもつと容易くできるだろう。

せいぜい私のお転婆な行為に気付いた時、城の安全管理が行き届いていないことを嘆くといい。

「あら、あれは……」

遠くに見えるのは、ニコラスが閉じ込められていると思っていた塔。良く見れば中華風の建物で、とても煌びやかだ。

しかしその割には薄暗い位置にあり、あんなに綺麗な建物なのにわざと隠しているとは思えない。

「何か秘密がありそうね」

行きたい。凄く行きたい。

しかし私はあくまで賓客。

賓客が主の了承も無く屋敷の中をうろつくのは失礼にあたる。今私が何をしているのかは置いておいて。

ルイはあの塔に私が近づくのを嫌がっていた気がする。

絶対に、何か楽しいことがあるに違いない。

ルイに嫌がらせをするにはもってこいの何かが。

「ああ、行きたい……一体あの中に何が……ん？」

ジツと見つめていると、塔の中から1人の女の人が出てきた。

距離があるのでよく見えないけれど、どうやら結構年配の方のようだ。

そして、その年配の方と目があつた。

「あ、ヤバ」

当然、その人は驚きに目を見開き、アワアワと口に手を当てたり辺りを見回したりしている。

まずい、非常にまずい。

こんなのがルイにばれてしまったら、怒られるどころの話ではない。慌てて「シー！」とジェスチャーすれば、その人は驚いたままコクコクと頷いた。

相変わらず危機意識の低い城内に呆れつつ、屋根の上を歩いて近寄

れるところまで近寄った。

「ごきげんよう、マダム」

「ごきげんよう。そんなところで何をしていたらっしゃるの？」

「その……ちょっと冒険を」

「そう……そうなの……随分元気がいいお嬢さんなのね」

ですよね。すみません。

でもジツとしていられない性質でして。

「もしよかったら、こちらへいらっしやらない？」

その人はとても魅惑的な笑顔を浮かべ、私に向かって手招きをした。主の許可なく城内を闊歩してはいけない。しかし、この人は主より偉そうな二オイがする。

（いや……でも……）

「大丈夫よ。貴女、ルイの後候補でしょう？ 少しお話しをしましょう。わたくしはルイより偉いから、怒られそうになったら守ってあげるわ」

「喜んで」

サツと立ち上がってお嬢様挨拶（スカートを持ち上げるアレだ）をして、私は雨どいを伝って下に降りる。

下は目も眩むほどの高さである。

しかし、遙か下にある塔の入り口にいる人と話ができるくらい静かなのだ。

すなわち、ここには滅多に人が来ない。

私がこんな命がけの脱走をしようとも、誰も気付かないという訳で下で「まあ！」とか「あらやだ！」とか聞えるけど、要は落ちなければいいのだ。

* * * * *

「はあ……はあ……」

「あなた曲芸師みたいなのね！」

「あ、ありがとうございます……マダム」

興奮しきったマダムは私をバシバシ叩くと、「今、お茶を入れさせるわ」と言って私を建物の中へと誘導した。

建物の中は本当に中国の建築物の様なつくりになっており、マダムも洋風と中華風が混ざった不思議な、しかし美しい服装をしている。

「さあ、座ってちょうだい。貴女の話はだいぶ前から聞いていたのよ。でもルイが何だかんだと理由を付けて合わせてくれなくてね」

「あら、ご挨拶もせずに失礼致しました」

「いいのよ。怪我をしていたのでしょうか？ その……羽を失ったと聞いたわ」

至極残念そうな、憐れんだような声を出すマダム。

私とは言えば、羽の重要性を分かっているにせいかあっけらかんとしているというのに、ここまで他人から心配されるとは思ってもみなかった。

「まあ、落ち込んでいても仕方がないわ。この魔術組織には自信があつてよ？ きつとはえてくるわよ」

マダムはニツコリ微笑んでお茶のお代わりを注いでくれる。

勧められたお茶菓子は見たことも無いようなカラフルな色をしているが、味は日本人好みで食べやすい。

触るとフワフワしていて、食べた瞬間モチモチの食感とフルーツの香りが口いっぱいに広がるお餅のような物にはまり、ひたすらそればかり食べていたら「もっとお食べなさい。若い子は沢山食べてくれるから嬉しいわ」と笑われた。

「さあ、まだ貴女のお名前を聞いていなかったわね」

「まあ、失礼致しました！ 私ったら食べるのに夢中になってしま
って……」

「あらあら、いいのよ。嬉しいわ。わたくしが作ったの」

「え！？ そうなんですか！？ これ凄く美味しい！」

思わず素が出て「ゲツ」と思っていたら、「畏まらなくてもいいの
よ。貴女のことはいく知っているわ」と言われる。
どうやら私の悪行は知れ渡っているらしい。

「ねえ？ わたくしとお友達になって下さらない？ ずっとここに
1人であるから、メイドしか話相手がいないの。でもメイド達とは
対等に話せないでしょう？」

「え……？ でも、私はあまり外に出られなくて……」

「なら、こうしましょう？ ルイにわたくし達が会っているとバレ
たら怒られてしまうから、毎日時間を決めて会うの。ルイが一番忙
しい時間によ。そして、お互いのことは別の名前で呼びましょう？
その方が、万が一バレた時にしらを切れるもの」

ほほう。このマダム、中々話の分かるお方だ。

見たところ70歳は超えていると思われる方の知識だけある。

まあ、知識というか、もしバレても権力でねじ伏せそうな感じはす
るけども。

「わたくしのことはマダム・リーと呼んで頂けるかしら」

「わかりましたわ、マダム・リー。私のことはすでにご存じだと思いますので、スミレで結構です」

こうして、マダム・リーと秘密のお茶会が始まった。

* * * * *

「ルイー。君の可愛いお姫様が、マダム・リーとお茶会を始めたのには気付いているかい？」

おどけたように言うユニに、ルイは眉根を寄せた。
ほお、とセナが興味深げに口角を上げる。

「あれは禁忌では？ どうやって近づいたのでしょうかね」

「待て、何のことだ。誰だそれは」

「あれ？ スラング知らないの？ 『リー』には汚らしいもの

って意味があつて、見たくもない忌々しい物をさす時に……」

「そうじゃない。重要なのはそれが誰で、何故外に出ることのないスマイレがそいつと会っているかだ」

不機嫌そうにルイが言うと、セナは頭蓋骨の形をした水晶を取り出してルイに差し出した。

水晶は薄ぼんやりと光り、頭蓋骨の口に啜えられた大粒の宝石がギリギリ輝きを増す。

「見えませんか？」

「これが見えるのはお前だけだ」

セナはクスクス笑うと水晶をしまう。

そして懷から何枚か紙を取り出すと、綺麗に折って動物のような形に仕上げた。

それに息を吹きかけると紙は踊り上がって窓から出ていく。

「どうやら……古の胡蝶が再び空を舞う練習をしているようだ」

ボソツと呟いたセナのつぶやきに、ルイの表情はこわばった。

「何故……彼女とスマイレが会っている」

「スミレは飽きさせないなあ。ルイのお嫁さんにぴったりじゃない。ただのお姫様は嫌だっけって言っていたし？」

「冗談を言っている場合ではない！」

ルイは机に拳を叩きつけると、勢いよく立ちあがって部屋の外へ出ようとした。

「待ちなよ。丁度いいんじゃないの？」

「邪魔をするな」

「恐れながら陛下。私もユンと同意見です」

「どっという意味だ」

「そのままの意味ですよ」

セナがニヤリと笑う。

ユンは肩をすくめて壁に寄りかかった。

「陛下はスミレ様が好きではない。であれば、ただ娶るのではなく、もう1つの可能性に期待しては如何でしょうか？」

「……それが……それが胡蝶との接触だと？」

「それ以外に何が？　運が良ければ彼女は……」

「俺は……そこまで狂気じみた男じゃない。……セナ、お前は人の心を忘れたか？」

怒りに震えたルイが何とか言葉を絞り出すと、セナは嬉しそうに笑った。

「おや、てつきり賛成して頂けると思ってたのですが」

「言っただけだ。そこまで人道から外れることはできん」

「随分と胡蝶を嫌っておられ……」

ルイは音も無くサーベルをセナの首筋にあて、一言「黙れ」と呟いた。

ユンはそれを見て面白そうに笑う。

「スマレの身に危険が及ぶことは許さん。あれは俺の所有物である」

「アハハ！　嫁じゃないんだ！　スマレが聞いたら怒りそー」

「利用価値があるうちは『物』で十分だ」

「何それ？　利用価値が無くても手元に置いておきたいと思ったら

何になるのさ」

それを聞いてルイは鼻で笑うと、サーベルを鞘へしまった。

どつかりと椅子に腰を下ろすと、アゴの下で手を組んで不敵に笑う。

「そんな日は一生来ない。ユン、お前が見張っておけ。必要ならスミレを閉じ込めろ」

「僕を？ 僕の部下で十分じゃない。ただの後候補なんだから」

「俺の命令に背く気か？」

睨みつけるルイを見て、ユンは今にも吹き出しそうになりながら手を振った。

「ねえ、ルイ。僕には不器用な男が好きになりかけた子を目の前にして、どーして良いか分からないように見えるんだけど？」

「本当にそう見えるのだとしたら、お前の頭の中は相当平和なのだろうな。小鳥がさえずりながら飛びまわってるんじゃないか？」

「可愛いくない？」

「可愛いわけあるか。さっさと行け」

ユンは「ハイハイ」とおかしそうに笑いながら出ていく。
それを見送ったセナは、クスクス笑いながら襟もとを正した。

「式を放っておきましたから、何かあったらお知らせ致しますよ」

「そうしてくれ」

「……陛下、私はユンに賛成ですがね、束縛のきつい男は嫌われることを覚えておくといい。そして貴女の愛は解りにくい」

顔をしかめたルイがサーベルに手をかけた瞬間、セナは煙と共に消えた。

残されたルイが窓の外を見る。

「あれは……俺の所有物だ。所有物を大事にするのは当たり前だろうが。大体、いつあの鳥ガラに惹かれる瞬間があったというのだ」

つぶやいた独り言は、誰にも聞かれることなく小さく響いた。

第三章 孤高の王女03

「お前、最近どこ行っているんだ？」

「え？」

ヴァン。貴方そういうことはこっそり私にバレないように探るものなんじゃないの？

ムスツとしたまま言われたって誰が言うもんかって気持ちにしかないじゃない。

「お前がこっそり抜け出しているのは気付いてる。まだ陛下には言っていないが、きっと陛下も……」

「ヴァン……貴方、愛しの陛下に秘密を作る気？」

「違う！ はっきり分かるまで報告を控えていただけだ！！」

この男は本当に面白い。

陛下のこととなると盲目になってしまうのが残念だけど。

嫌がりつつも時折私の様子を見に来ては、ご丁寧にお土産を置いて行くのだ。

今日もミミアンとかいう果物を持って来てくれた。

カリカリして甘く、香りは南国系の果実を彷彿とさせる。

見た目はアセロラみたいなのに、全然酸っぱさのかけらも無く、ただただ甘い。

でもこの甘さがしつこくなくて……まあ、それはいいわ。

「駄目よ、ヴァン。怪しいと思ったなら例えそれが些細なことでも逐一報告なさい。そして情報不足であるのなら『この件については不明瞭な部分が多い為、現在調査中です。分かり次第、追ってご報告致します』とでも濁しておけばいいの。いざ大事になって『実は知っていたのですが、はっきり分かるまでは報告を控えていました』なんて言ったら洒落にならないわ」

「……お前、意外とまともな……じゃなくて！ この件についてはお前のことだ……！」

「ヴァンは知りたがりねえ……私のこと好きなの？」

「違う……！」

きつとあれだ。

年上に可愛がられるタイプだ。この男は。

いや、見た目的にはヴァンの方が遥かに年上っぽいけど、打てば響く様な逸材を私が放っておけるはずがない。

「ヴァン、よく聞きなさい。女には秘密の1つや2つあるの。それを一々詮索するのは野暮よ」

「その秘密の内容による。もしお前が良からぬことを企んでいるのであれば、お前に対してそれなりの態度を取らなければいけない」

「貴方の骨の髄まで騎士道を通す所は結構好きだけど、人には詮索されたくないことだってある」

「王族は秘密なんて持てない。今までもこれから。それが嫌ならとつとと帰ることだ」

……それができたら帰ってるっつもの。

なんとなく哀れそうな顔をしているから、嫌味出ないことは分かる。そして、この男が不器用ながらも私の面倒を見てくれていることも陛下に言わなかったのは、既に本当のことを知っているからだろう。私が誰と会っているかまでは分かっているのかもしれないけど、息抜きもできない私を可哀想に思っているに違いない。

でも、会っている人物が危険人物やスキヤンダルを呼ぶような人物であれば、「火遊びはお止めよお嬢ちゃん」ってことだ。

「安心しなさいな、ヴァン。他に危険が及ぶようなことはしていないわ。もし何か起こって貴方が陛下に怒られる羽目になったとしたら、代わりに私が怒られてあげる。私のせいだしね」

「不本意だがお前を監視し、守るのは俺の任務。任務を遂行できないような奴は怒られて当然だ」

「それは対象が面倒な奴じゃなかった場合限定でしょう？」

面倒な奴が依頼や仕事、共同作業の対象だと苦労する。学生時代でもそれで何度か苦労したけど、バイトを始めた時に社会にはもっと凄いのがいると知った。

せっかくコツコツと積み上げてきた実績や苦勞が一気に水の泡になることだつてある。

もっとニュートラルに人生送れないのかと不思議で仕方がないけど、今、その面倒な奴に私になり下がっていると言う訳だ。

そして「大丈夫、私が責任取るし」とこれまた信用ならない一言を発しているわけで。

こう言つて責任を取れた奴を見たことが無いし、そもそも責任が取れるような人はこんな愚かなことはしないだろう。

では何故私がそんなことをするのか。

おばあちゃんの言つていた「自分がされて嫌なことは、他人にするな」という説教が頭をよぎるが、これは致し方のないことだ。

だつて嫌がらせだもん。

（でもまあ、私にだつて良心があるわけで……そしてそれが結構痛むわけで……）

万が一の時は、私がしっかり責任を取るくらいのこととするし、仮に他人や国を巻き込んだの大事になりそうだったら、とつとと危険から身を引く。

幸い逃げには自信があるので、そうそう愚かなことにはならないだろう。

「ねえ、ヴァン。貴方そろそろ見回りに行かなくちゃいけないんじゃないかって？」

「……抜け出す気だろう？」

「そうね」

ヴァンは私が入口から抜け出すと思っている。

だから、私の返答には何も言わずに私を睨みつけて去って行くだろう。

そうして入口の前で振り返って小言を言うに違いない。

言った後、私に丸めこまれて怒りに任せにドアを閉め、鍵をかける気だ。

「お前をベッドに縛り付けられたらどんなに楽か」

「あら、そういうプレイが好きなの？」

「女が下品なことを言うな！！！」

案の定、ヴァンは鍵をかけて行つた。

阿呆だ。

「ヴァン、もっと賢くなりなさい。世の中には規格外の女だっているのよ」

さあ、ティーパーティーの始まりだ。

雨どいを伝うのはもう慣れた。

* * * * *

「あら、これも美味しい」

「でしょう？　新しくドライフルーツを手に入れたの。生地に練り込んだのよ」

マダム・リーの作るお茶菓子は美味しい。

食べ残しを頂いていきたいくらいだけど、帰りになるといつも「残ったものはあの子たちに食べさせてあげたいのだけど、いいかしら？」と言ってメイドを見るのだ。

断れるわけない。

そもそも……

「……マダム・リー？」

「……あら、ごめんなさいね。ちょっとぼーっとしてしまったわ。今日は日差しが強いから、暑いわね。頭の中が茹だってしまいそう。倒れないうちに中に入った方が……まあ、ゴミが付いているわよ」

「え？」

マダム・リーが私の襟もとに手をやり、私の目の前に差し出す。それはクシャクシャになった紙で、こんな大きなゴミをつけたまま歩きまわっていたかと思うと「なぜ気付かなかった……」と情けなくなる程であつた。

「きっとセナの意地悪ね。あの子はよくこつという悪戯をするのよ。今日彼に会わなかった？」

「ああ……今朝がた妙なことを言っていました」

「そう。なんて？」

何だつただろうか……確か、胡蝶がなんとかと言っていた気がする。……思い出せない。
セナの話は難しくて眠たくなるので、あまり真面目に聞いていなかったのだ。

「ごめんなさい、はつきり覚えてはいないのですが……確か私のやつていることがバレているようなニュアンスのことを……」

「まあ」

可笑しそうに笑いながら、マダム・リーは紅茶を飲んだ。
小さく「ではルイにもバレているのね」と言つて笑い、全く困っていない顔で「困ったわね」と言いながらメイドに中に入る準備をするよう呼びかける。

「そうかもしれません。ヴァンにはバレバレでした。誰と会っているかまでは分かっているように思いましたが」

「そうなの。でも邪魔をしてこない所を見ると、暗黙の了解なのかしら？」

「かもしれません。きっと、私の息抜きの為に……」

ぐらりと視界が揺れた。

「あらあら……！ 大丈夫！？」

「ああ、はい……ごめんなさい……ちょっと暑すぎたみたいで」

熱射病になりかかっているのかもしれない。

日差しが暑いから気を付けていたものの、このぶ厚いドレスでは汗が止まらない上に熱がこもって仕方がなかったのだ。

「ごめんなさい……マダム・リー……ちょっと、戻ります」

「駄目よそんな真つ青な顔して……！ こちらで休んで行きなさいな」

「いえ、そう言う訳には……黙って出てきているので……バレたら

……」

「もうバレているわ。もし何か言われたら私が庇ってあげますからね。さあ、いらっしやい」

数人のメイドに取り囲まれた時には、私の意識は深い闇の底へ沈んでいった。

* * * * *

「おい、スミ……なんだ、ここにもいないのか」

勢いよく開いたトイレの扉を閉じ、ルイはため息を吐いた。

「いったいどのトイレにいるんだアイツは」

「陛下！ こんなところに……今お時間よろしいでしょうか？」

「ヴァンか。どうした」

ヴァンは恭しく片膝をついて頭を下げる。

それを片手で制して立ち上がりさせ、スミレが見つからない苛立ちから小さくため息を吐いた。

「実はお耳に入れておきたいことが……」

「ああ、陛下。大変なことになってしまいましたよ」

「セナ……お前もか」

「僕もちよーつと言いたいことがあるんだけど」

「……」

勢ぞろいした家臣に嫌な予感を感じつつ、執務室へと向かった。

道中、誰も話すことはない。

執務室の椅子に座ると、珍しく焦ったようにユンがヒラヒラと手を振った。

「スミレ姫を見失っちゃったんだけど」

「なんだと!？」

「アハハごめーん」

軽い口調に似合わず緊張した面持ちのユン。

ヴァンが頭を抱えて真っ青な顔をしているのを見て、ルイは思わず顔を引きつらせた。

「お前も何か言いたげだな、ヴァン」

「は、はい……その、実は当初から知っていたのですが……情報が不確かだった為、報告を怠りました」

ルイのため息が部屋に響く。

ヴァンは唇をかみしめて地面を見つめた。

「陛下、恐らく私の報告が一番悪い知らせなのですが」

「……よい、言え」

「今朝、式が燃やされたのですが、燃やされた式から胡蝶の紋章が浮かび上がりました」

頭を抱えたまま、なんとか打開策をひねり出そうとするが、全く思いつかない。

胡蝶とはまた面倒な……と怒りしかわいてこず、考えがまとまらないのだ。

「恐らくスミレ様は胡蝶と接触しているものかと」

「馬鹿な。彼女は死んでいるんだぞ」

「生きていらっしやるではありませんか。死んでいるというのは、世間的に言えばです。陛下、如何なさいますか」

胡蝶は何を思つてスマレと接触したのだろうか。

何故、今になって表だつて活動をするのだろうか。

どうせ胡蝶とは会えまい、会っているのは別の人間だろうと油断していた。

完璧にルイの落ち度だ。

もし本当に胡蝶の仕業であれば、大変なことになるかもしれない。

「しばらく様子を見る。手は出すな」

「陛下！」

「では貴様は……！！ 貴様は…… 国の礎である胡蝶の領域に踏み込めるとでも……？」

脱力したように項垂れ、ルイは3人を部屋から追い出した。

部屋の中から花瓶の割れる音がして、それっきり何も聞こえなくなる。

追い出された3人は、目配せをして廊下を歩きながら小声でつぶやく。

「ユン、貴方は引き続き情報を集めて下さい。ヴァンはすぐに踏み

込める準備を」

「陛下の指示なく動くのは如何なものかと思うが」

「では、このまま黒い薔薇の君が使いものにならなくなってもよいと？　胡蝶は確かに偉大だ。しかし、所詮は過去の物。今のこの国に必要なのは老害ではない」

ギリツと噛みしめた唇に血が滲み、怒りに小さく震える。

セナは不敵に笑うとフードを深くかぶった。

「胡蝶と接触を図れば羽が元に戻るかと思いましたが、やはり危ない賭けでしたね。失敗しました」

「まー概ねセナに賛成。踏み込むのは陛下の答え次第かなあ？　僕の威厳に関わるし、すんごい頑張っちゃおっと。死にかけのババアになんか負けてらんないよ」

舌舐めずりをしたユンは音も無く消え、残された2人も無言のうちに解散した。

ギリギリと齒車が動き出す。

第三章 孤高の王女04

ルイは頭を抱えて床に座り込んでいた。

スマレがいなくなってしまうたのは、まぎれもなく自分のせいだ。自分のせいで、スマレの命が危ないかもしれない。

あの愚かで、自分を敬わず、すぐに楯突いてくる女がいなくなる。そう考えただけで、高所から飛び降りたかのような内臓の縮みあがりを感じる。

「胡蝶……古より黒い薔薇の君の始祖として敬い、崇められてきた」

ポタリとサイドテーブルの上の割れた花瓶から水が滴る。

「胡蝶……国の礎として君臨し、老いることなく、朽ちることなく永遠の時を生きながらえる」

再び水の滴が落ちる。

床一面にじわじわと広がる水は、ビロードの絨毯を濃い赤に染め上げていた。

「胡蝶……その存在は……神に、最も近い存在。国を守り、王家を守り、民を守る……古の胡蝶……」

ルイは自分の髪をギリギリと握りしめ、歯を食いしばる。

「俺は……胡蝶を殺せるのか……？ 黒い薔薇の君を守るためだけに……胡蝶を？」

その時であった。

トイレの方からパシャパシャと水音が聞こえる。

「……誰もいないはずだが……スマレか!？」

慌てて駆け寄って扉を開いた瞬間、ルイの喉の奥から人生で初めて出したであろう音が鳴った。

グウともエウとも聞こえる困惑の声。

それは、目の前に広がる光景を見れば、例え数々の死線をかいくぐってきた王であろうとも出ずであろう、と納得できる声である。

「……」

「……」

真っ白な獣が便器にはまっている。それも方から下が全てだ。

その獣は、何も言わずにこちらを見ていた。

場所が場所だけに違和感を感じまくりだが、なんとなく神々しい気もする。

「よもやこのような中途半端な格好になるとは思っていなかったのだ」

「そ、そうなのか……わ、私はルイルミアレオデルムルカアルファルロクミカルフォールドデンバスター。この国の王だ。お前は何者なのだ？」

「貴様は何を言っているのだ。異国の呪文か」

「……まさかとは思うがお前は……その、スマレが言っていた『キツネ』とかいう奴か」

確かスマレは『白いキツネ』と言っていた。

『キツネ』と言うのがどういう意味を持つのか分からなかったが、この獣の名前なのだろう。

何せトイレからはみ出ているのだ。ほぼ確実にそうに違いない。

「狐……あの女……そう言えば我のことをそのように呼んでいたな」

やはりか、と納得していると、キツネはルイに向かって向き直った。

「そう言えば小娘の気配が弱くなったが、なんぞあったか」

「……ああ」

ルイは唇をかみしめると、視線を外して床に座り込んだ。
キツネと同じくらいの視線の高さになる。

「胡蝶は知っているか？」

「知らぬ。しかし禍々しい気配がするのは解る。カビ臭い嫌な臭いである」

「そのような言い方をするな！」

思わずカツとなって怒鳴れば、狐は特に表情を変えずにフンと鼻で笑った。

そして窓の外を眺めながら鼻にしわを寄せ、牙を見せる。

「あれより我の方が長生きである。あのような偽物が神を名乗る」と自体不愉快と言うものよ」

「……偽物だと？」

目の前の狐の毛並みは極上で、とても年老いたようには見えない。
話し方こそご意見番のじい様どもに似てはいるが、ルイからしてみれば若い獣にしか見えなかった。

「小僧、聞け。我はあの小娘を失うのを良しとせぬ。何故なら恩があるからじゃ。我は恩を仇で返すようなことはせぬ。だから別世界へ行っても良い待遇をと思つて金持ちの家に落とした。しかし――
……」

狐は細い目をさらに細めてルイに視線を合わせた。

「お前に預けたのは失敗であつたな」

忌々しい物を見る目。

その視線に、ルイは齒がみをした。

「お前は何を知っているのだ？」

「……小僧、口のきき方に気をつけろ」

スツと冷気がおりてビリビリと空気が震え、思わずルイは生唾を飲んだ。

ひょうひょうとしていた狐が、世にも恐ろしいモノに見える。

「……頼む、力を貸してくれ……」

「本来であれば貴様の様な小童に力を貸すのは、例え極上の生贄を差し出されても断るところではあるが、此度は小娘の為である」

そう言うと狐は小さく息を吐いた。
その途端、辺りに黒い霧が出て、ルイを包み込む。
あっと思つた時には、ルイは黒い霧の中にいた。

「小僧、見えるか？」

「何も見え……あれは……」

黒い霧の向こう側。

かすかに光る何かがある。

目を凝らしてみれば、それは映像であつた。

段々大きく鮮明になる映像。

そこには寝台に横たわるスマイレが映っていて、そのすぐ隣には1人の老婆が立っている。

「見えるか、老いた人間が。あれが、お前達が『古の胡蝶』と呼んでいるものよ」

「ば……馬鹿な……本当に生きていたというのか……!？」

「おかしなことを。お前達も『生きている』としているではないか」

「それは象徴的な意味での話だ!」

胡蝶は生きている。

それは当たり前前の物語で、生き神として祭られている。しかし、裏を返せばただの象徴。

祭つてある塔の扉を開ければ、骨壺があるだけとされていた。これは王族しか知らないが、知らないがゆえに絶対の確証をもって言えることである。

ただ、国民だつて生きているとは思っていない。

しかし、生き神として長らくそう語られてきたのだ。

それは、もはや当たり前前の事実として認知されていた。

「小僧……我はあれが邪魔である。お前が長々と続く忌まわしき教えに背く覚悟があると言うのであれば、力を貸してやろう」

「背く……胡蝶を……消す……？」

「そうだ」

狐はニヤリと笑つと、新たな映像を映した。

そこには大きな柵があり、中には美しい蝶の羽が浮いている。

「これは……！」

「あの小娘のものよ。老いた蝶が隠しているようだ。古き教えに従うのもよいが、時に新しい物を取り入れる方が良い場合もある。あらゆるものの上に君臨する王であれば、重要な場所での判断を誤るな」

「……」

「……まあ、老いぼれの戯言である。最終的な判断は自分でせよ」

そう言うと、狐はスツと便器に潜り込んでいった。

「ま、待て！ 力を貸すとは具体的にどうするのだ！！」

「それはその時にならぬと分からぬ。全てはお前次第」

「それでは分らないではないか！ 待て！！」

かすかな獣臭を残したまま、狐はぽちゃんと水音を立てて消えた。

「くそ……！！」

「……へ、陛下」

「なんだ！！」

振り向いて気付く。

自分が便器に身を乗り出して悪態をついていたことに。

そして、それを発見したメイドが血相を変えていることに。

「……貴様は今、何を見た？」

「……何も見ておりません、陛下」

「……よろしい、持ち場に戻れ」

「……畏まりました」

メイドが消えたのを見計らってため息を吐き、天井に向かって声をかけた。

忍び笑いと共に現れたユンは、可笑しそうに肩を揺らしている。

「スマレ姫がいなくなつて、頭可笑しくなつちやつたかと思つた」

「違う……お前には見えていなかったのか？」

「見えるわけじゃないじゃん。何かの気配は感じていたけどね」

未だ笑いが収まらないと言つた感じのユンをボーッと眺めながら、ルイは今までの人生を振り返っていた。

エリート街道まっしぐら。

親の言うことに従い、頭も良く、人望もある。

民からは癒しだの天使だの言われて悪い噂は1つとして聞いたことが無い。

自分で言つのもなんだが、本当に良くできた物語に出てくるような人格者だ。

この人間らしく悪態を付く王様の姿は、一部の物しか知らない。

しかしだ。

スミレが来てからは、ちょいちょいメイドに本性を見られている。メイドだけではない。この間は兵士にもみられた。口止めをしているから噂にはなっていないが、皆、相当驚いた表情をしていた。

「……いつからおかしくなったんだ」

スミレが来てから、何かが少しずつ崩れていく。全て崩れ去った後には何が残るのか。その変化が、ルイには恐ろしくてたまらなかった。

「僕は興味深く見物しているけどね」

「……」

セナも同じようなことを言っていた。ルイが生き生きしていると。

では今までの自分は死んでいたのかと聞けば、笑ってはぐらかされた。

ヴァンは忌々しいという顔をしながらも、よく面倒を見ている。また、何かが、ゆっくり崩れる音がした。

「ヴァンとセナを集めろ」

頭を抱えて深いため息を吐く。

ため息は、恐れからか怒りからか、震えていた。

「……胡蝶を解放する」

「承知」

恭しく頭を垂れたユンが、音も無く消える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3421u/>

トイレトリップ ～トイレの向こう側の世界～

2011年10月31日15時18分発行